母の遊戯及育児歌
説明
下

372.2
F92J
v. 2

3 0112 099043116

Friederich Wilhem August Froebel.

Mother-play and nursery songs.

Kobe, 1907.

母の遊戲及育兒歌下卷目錄

れ、爲に逡巡敢て進む能はざるなり、

此調和の生命の精神を覺知せしむることは自ら少女を促して方に成長の途にある事物に注意し、以て自然に其精神を養護扶掖するに至らしむる所以なりとす。百合花は兒童の花にして且つ其無邪氣を顯すの肖像なれば少女は特に之に灌漑し之を培養するを好むなり。而して又同じ調和の精神は亦强壯なる兒童を鼓舞し之をして好んで活物の生活を考察せしむ、例へば小鳥をして高く蒼空に翔らしむべき勢力を包有する所の鳥の巢の如きものの特に其注意と驚異の念とを惹くが如き是なり、

童男童女の幼時の遊戯は其慈母の愛撫に由り漸次に嚴肅なる生涯の美はしき實動となるへし是れ此初階に於て彼等は其心の深奧に潛む所の思想を活動せしめんがために種々の適當なる事物を求め以て一層强健可愛なる少年の時代に進み入ればなり。百合花の甘快なる香氣は男兒の心の渴望を醫し。其嬌態ありて而も剛勁なる姿は又女兒の心を慰むるものなり。將來開て一個の婦人となるべき蕾

の姿なる少女は其均齊的に開發せし精神に由て安立すると、猶そのよく權衡を持して容易旋轉する球上に安立するか如なるへく。而てやがて大人となるべき生長の途にある男兒は其思慮ある精神に於て光明を求ながら立方體の上に堅立せり」、斯る事情の下に於て眞率、快活、仁愛、平和の花は、自ら彼の兒童に培養せられ常に生命の源泉なる太陽に向て發育せんと勉め居る所の百合花の莖より咲き出るを見るなり。天然は其晝夜の現象に於て此の如き動作と此の如き勞心とに向て其祝福を降注するを常とす即ち晝間の太陽と夜間の星辰とは共に其美しき光を凡ての母に注ぎ「思慮あり敎育ある母のみ獨り其兒をして幸福ならしむるを得」との眞理を其心に知覺せしめ。天使は此の如き純潔慈愛にして其兒の養育に勵精する母に酬ゆるの報償として平和の枝を齎らせりとの使命を致し。而して神の靈は思慮周密にして、誠實なる母の努力に對し最も高尚なる制裁を與へんとして鴿の如く天より降り雲の中より『是れぞ我心に適ふ生命の花園に於ける我小兒の養育なる』との賞詞を漏らし玉ふなり、

●第二

多福なる母よ卿は須らく其兒の事に卿の全心を傾注し「是こそは神の性質の顯現として萬物の父の贈り玉ひしものなれば即ち神と一なる物にして、天實に余をして注意周到に之を養育せしめんが爲め特に附托し玉へるものならめ」との感念に激勵せられ「神の直接の賜物」として謹んで卿の小兒を見よ、

卿は方に卿自身の性質の反映なる多般性と個性とに富める此小兒の性質は卿の敎育に由りて開發せらるゝものなることを預期して喜悅の情に滿たさるゝなるべし。卿は卿の小兒の性質中に益々發揮し來る所の多般複雜及反對性を觀察するに當り、此等の性質は異日其齡の進むに從ひ益美しき形狀を以て發顯し來ることを預知して中心不可言の歡喜に充たさるゝならむ。卿は卿の心の明鏡に照し見て此等の性質がよく相鎔合して調和、光明の生涯となるを猶ほ彼の複雜なる外界の顯象が秩序正しく相調和するが如くなるべきを信じて疑を容ざるならん、卿の小兒の心靈に存せる複雜及反對の外相の發現は其生命の十全なる調和の要

素として明かに表示せらるゝなり。卿は當に見るなるべし、彼の四肢の運動及使用と其五體及感官の活動が如何に彼の心を奪ふかを。而して又其生命の複雜なる所及其外相の多般と反對との存する間に於て如何に彼の生命の唯一なることを證明理會すべきかを見。又彼が其身外の事物を已が身に收取し、同化して更に之を外に發すること恰も彼の草木が地より種々の養料を取り之を消化して花果枝葉となして再び之を外に發するか如くなすに當り、如何に彼が自ら其獨立の個人性を感知し、又之を表彰するかを見るならん。之を要するに卿は卿の小兒の一切の擧動に於て彰はす所の此一致(萬物の内部の一致)の預覺により彼の本性の心靈的唯一なることを曉知し得べきなり、

卿の小兒の天性、生命、靈魂、精神、預覺、感情、知覺、自識の一なること、並に其身内身外の萬事をして總て美はしき調和をなさしめんため、よく小兒の性を解し、正當に之を處理し、以て養ひ來りし所の小兒の生命の種々の表號の多般及反對は實に母たる卿が見て以て喜悅となす所のものなり、

此の如くよく注意して養育する內、及卿の兒童が發達して强壯となる內に又は彼の生命の種々の表號に於て卿は遂に一の明白なる確信を得るに至るべし、卽兒童は糢糊として萬物の一致を預想するのみならず又萬物は其源を生命の唯一の源泉に有するものなりとの思想に導き到らしむる所の預覺ありて自ら彼の裏に開發するものなりとの確信を得るに至るなるべし。蓋し卿が卿の小兒の性は猶卿自身の性の如く神に似たるもの卽ち神の一閃光なるを明に認識するが如く小兒も亦彼自身に於て萬物は唯一の生命の源泉より來ることを覺知するなり。何となれば總ての存在と生命とは神が其中に活き玉ふことを告白するものに外ならざればなり、

故に親愛なる母よ卿が神と一なるが如く亦卿の小兒とも一なることを感じ而して又卿の小兒は彼自身に於て一。外界との相關に於て一。人類と一。天然と一にして加ふるに萬物の父なる神とも一なるを思ひ。神の小兒として之を目し之を養育する事は實に卿の生涯の最大なる問題にして又最大なる喜樂なり、

卿或は問はん。如何にして。又何に由りてか此等の事を知り得べきかと。　此問題は既に鏤刻して卿の心裡にあり。卿の簡素なる母儀的擧動の中に自然に、無意識に、作爲を用ひずして顯はるゝに非ずや。卿の小兒の體軀の多般にして完一なる事——其四肢、五官、其傾向及觀察、その自覺に達せん爲の運動、力爭、並に卿及他人に對する關係、此等は實に此答解を彰はすものに非ずや、

卿は自ら知り、語り且つ感ずるに非ずや、卿の小兒の彼自身及一切の生物の法則に遵て支配せられ養育せられ訓練せられざる可らざる事を。　彼の五官が能く調和活動的の思想界と相關聯するが如く、其身體は彼と物質界とを連結し其四肢は常に新たなる關係を以て彼と外界とを關聯す。將に發達せんとする彼の自識力。高きに達せんとする其預覺及び將に醒覺せんとする其精神は一切の生命と彼とを一致結合せしむるなり。　彼は最初此等のものと結合せずと雖ども、其時にても既に生命の全界並に靈界とは內部の一致を有することを示すなり。　忠實なる母よ卿の小兒を領會すること即ち其天性を領會し此天性と相應する顯象にして自發的

に元始より結合せるものを理解し、其存在の（小兒の）凡ての法則と要求とに照らして其敎育を施し之を發達せしめ、形成せしむる事は卿の兒童の敎育に關する問題を解釋するに少なからざる關係あるものなり、

然らば即ち卿の小兒が複雜に、反對に、又調和の有樣に於て其天性を顯はす所の顯象とは何ぞや。他なし有情と非情とを問はず凡そ生命が形象を假りて發顯する所には普遍なるもの即ち人間界は勿論動物界及植物界にも普通に發顯する所の現象即ち是なり、

吾人は種子の中に穀物を見、卵子の中に羽鳥を見るが如く、又た感情の中に思想を見ざる可らず。蓋し眞の確實は常に不確實より開發するものなり。小兒の生命の最初の表彰も亦此の如く自然に卿に顯はるゝなり而して生命の皮殼なる此不確實の中に圓滿なる生命伏在して自然に顯はれ來るなり。是れ卿が將に綻びんとする蕾、漸く生長せんとする仔鹿に於て常に見る所にあらずや。　卿は小兒の中に存する圓滿なる生命を見て大に喜ぶが如く又生命が附與し抽出する所の一切の事を感受するの性を彼の裏に喚醒せざる可らず。嫩葉や幼鹿は日光、温熱の漸次の感化及其周圍の最も精緻なる印象に由て開發せらるゝものなり。而して天然界に於て

是等の嫩蕾幼鹿が境遇の最も輕微なる變化の爲に攪擾せられ、最も輕柔なる觸接の爲に惹かるゝが如く小兒の感受性は極めて鋭敏なるものなり

小兒の感じ易く又激し易き性は往々苦痛と困難とを小兒自身及び之と倶に居る者（特に其母）に齎らすことありと雖ども又彼小植物、幼動物が天然の顯象中より其最もよく己に恰適したるものを撰擇するが如く小兒も亦此感受性に依りて容易に自己に恰適するものを識別し其眞成なる天性を開發するを見るなり、去りながら事の實際に於ては小兒は何事よりも第一に其の自然にして且つ自由なる發達を遂ぐる樣に促進せらるゝものなり。此事たる生命の一切の顯象、普通の活動及小兒の五官四肢全體の個人的活動中に顯るゝものにして、又其深奥なる源泉の精醇なるにも係す往々誤解、困難、苦痛危險を惹起する所以のものたるなり、此の如く五官四肢百體を強め之を開發することより起りて其使用に及び、感覺より始まりて知覺に、知覺より觀察思念に進み、個人及び其知識に親熟することより相關の認識に、四肢百體五官の健全なる生命より精神の健康なる生命に、思想と結合せし働作より純粹の思想に、健全強壯なる感覺より思念する心意に、外部の思念より内部の理會に、外相の彙類より内性の比較判斷に、外部の結合より遂に内部の

推理に到り、之を要するに外相の領解より內性の理會、智力の開發修養に達し、一切の現象の外相の理會より其基礎及び原因の內部の查察に至り、遂に生命を理會する理性の開發修養に及び之を助くるに小兒の心意及ひ精神の教育を以てし。斯くて各個人の個性の明亮なる肖像は遂に小兒の心に顯明なるに至り、而して彼は先つ自吾を認識し、次に己が其一部分に屬する所の全體を唯一觀念として悟了するに至るべし、

此の如く卿は卿の兒童を導て事物より圖象に、圖象より標號に、標號より靈性的完全體としての事物の本性の理會に至り。此に於て個人及び全體なる觀念開發せらるゝなり。彼の教育修養の漸次に進むに從ひ遂に卿の小兒は自己の生命は凡ての生命の一部分即ち其家族の生命、其國民の生命、全人類の生命の一部分なりとの事、及び神は萬事萬物の中に存在し、萬事萬物の中に活動し玉ふ事を明かに曉知するに至るべし。然らば彼小兒の感情思想行爲及び其身外の關係幷に其姿容に於て此の如く明白に其身內に形成せられたる生命の充實を如何に顯章せんかは此時期以後彼自身の生涯の問題となるべく而して彼は此の如くにして預覺生命及び天然は顯象、知識及び默示の如く相結合せらるゝものなるを知る可きなり。生

命は彼に對しては天然と人類の一致を啓示するものにして即ち亦神の唯一なる事を默示するものなり、故に其生命は平和の生命喜樂の生命たるべし。ア・母たるものよ、卿が彼の誕生以前に於て既に感じ、爾來常に卿の心に懷抱したる所の卿の兒童に對する志望は是に於てか成就せらるゝなり、

●第三　其子を思ふて他念なき母に就て

親愛なる母よ卿が卿の愛する嬰兒の睡顏を熟視する時温和なる炎の如く卿の全體に輝て之を暖むるものは何物ぞ。卿が卿の小兒を重要視するの大なるや、苟も之に關する事とし言へば、普通の少女にありては單に之を思ふことすら厭はしく感ずるばかり不快なる事をも卿は最も愉快なる勞作と思ひ最大の注意を以て之を爲すを見る。抑も卿をして其兒を重要視すること茲に至らしむるものは何ぞや。痛苦悲嘆の中に養育せらるゝ所の卿の兒童の生涯の顯象に於てすら若かく卿が最も些細なる事（例へば秩序清潔食物の如き其他何にても）も全體の大生命と相關聯し、互に相影響するものとして之を見るが故に非ずや。是れ卿が模糊ながらにも卿の兒童の生命を全體として之を觀測し個々物々如何に小なることも尙ほ自ら其進歩的開發を其

全體の中に現はすものなりとするが故に非ずや、卿の生涯と事業とに以上擧げたるが如き高尚なる性格を附與するものは一箇完全體として生命を預想し、知覺し理會し、思考する事即ち是なり。卿若し卿の愛兒がよく其命運を遂げ其職分を成すこと恰も卿が自ら思慮堅忍及勇氣を以て小事を重んじ不快なる事に克ち以て女たるの命運と母たる職分とを完遂するが如くならしめんことを望まば啻に初より卿の小兒の生（其中に存するものは最小の事と雖も一々深き意味を有し次第に其重要の度を増加する所の）を一の完全體として感知するのみならず、又其內部の生に於ても其外面の行爲に於ても確かに之を知覺し之を識認せざる可らず。顧ふに卿は上に擧げたる所及卿自身の生涯及心意、知識及行爲によりて此理を曉知せるならむ。よく此の如くなるを得ば卿の兒童の生涯は其發達の各一程度に於ても亦其全體に於ても凡そ人生の顯し得る所の一切の榮光ある性質を顯示す可きなり。母よ吾人は吾人自身の生涯に於て何物か缺乏する所あるを感知し得るに非ずや。蓋し吾人は心情及心靈の尊貴（即ち最小事を抱容し、而して生命の連結を成す所以のものたる）を離るゝ事早きに失せるを以て晩年に及ふ迄之を確執する能はざるは勿論明確に之を認識知覺することすらなす能はず、而して偶々之に達する時は時期既に晩く華麗富膽なる人生の盛時の既に去り其可愛の現象の永く消えて

迹なきの時に過ぎざるなり。夫は偖置き吾人に取りて一層貴重に且必要なるは如何なる現象なるべきか。吾人の一層平和安全に依據することを得可きものは何なるべきや。技術は此繪畫に於て何物をば絶えず新に吾人の眼前に齎らし來るや。技術の齎し來て玆に顯はす所は小兒の生即ち母らしき事と吾人の生涯の幼時に於ける小兒らしき事とを最も親密なる關係に結合交錯せしめたるもの是なり。然れども其實際に吾人の前に齎し得る所は僅に一種の形相（其形相は其が理想的の知覺を現はすものなれども其種類は一に過ぎず）に過きす。母が其愛により吾人の生命を養育して之を開發せし所の千百の形相は何れに在るか。彼等は既に過去の海に其形迹を沒し去れり。然れども其波浪は必らず早晩吾人及吾人の生涯の船を安全に港灣に送るなる可し。此眞理は必ず之を認識し之を確執せざる可からず、

此書に載する所の母子の遊戯に伴ふ唱歌殊に其歌に伴ふ繪畫は不完全ながらも卿をして兒童幼時の生涯は花蕾の時代にして人間全生涯發達の初段なることを想起せしむるのみならず又卿が卿の小兒に對して爲せし事柄及卿が據て以て行動せし所の精神、意見、見解、及目的に關する普通の知識眞成の知覺、及深邃なる認識に達せしむるの端を開くべし。母よ此の書を取りて研究する所あれ、而して之を

讀むに當りては願くは寛容にして多く圖解の巧拙を問ふことなかれ。蓋し此書は斯の如きの趣意を以て斯の如きの目的を達せんとする第一着の計畫なれば其不完全なるは固より言を須たず。然れとも卿は之に由りて卿が從來其高尙なる職分の預想に基き本能的に實行し來りし事の解釋を得へく卿が知見知覺に由るに非ずして單に愛の感情に刺衝せられて爲し來りし方法の往々不定にして過失ありしを發見し得べし。願ふに卿若し此書により此の如くにして謙卑なる自覺の域に達するを得ば容易に此第一着の著作の不完全を看過するなるべし。小兒等は既に彼等自身の爲めに自ら之を爲せり、此等の唱歌、遊戲圖解は卿のためには明白に現在を現はし且つ未來の直覺的知覺を與ふるが如く卿の愛兒の爲めにば卿の手に保持せられ卿の說話に由りて生氣を附せられ卿の愛情に由りて温められたる一種の繪本となり、彼等自身の短小なる過去の歷史即ち其最も幼稚なりし時の有樣を回想せしむるの用をなすべし。蓋し此の如きの過去の歷史を追憶し確かに之を把住せしむることは彼等前途の生涯の外部の基礎としてのみならず實に其全生涯の萌芽として緊要なることとなりとす、

何となれば凡そ慈愛の母が意味深き遊戲と唱歌とをもて喚醒修養し、其深き愛

を以て保護撫育せしものは必ずや永く榮えて惠の露に霑ふものなればなり、卿が其初生兒及び相次で生るゝ小兒を育つるに當り或は膝に坐らせ或は腕に抱きて其生命の微かなる表彰を見る每に起り來る所の感は亦此の如くならずや、卿を促して愛兒の幸福のため、又卿自身の平和と安心との爲に優しくも熱心に其兒の愛撫を勉むるに至らしむる所の此の感情は反覆之を考察するの價値はなきか輕々に看過して可なるへきか。若し此感情にして言語に盡し難き幸福の感にあらず卿の全身に汪溢し卿を導て高尙なる情態に進ましめし所の祝福の感にあらざりせば如何で卿の內界の高尙なる完全即ち天上の平和、清明の若かく卿の容貌に現はるゝことあるへけんや。卿を見し者誰か之を信せさらんや。然らば則ち小兒に生命と存在とを與へしてふ卿の自覺と、卿の彼に對する聰明なる注視とは如何にして此の如きの結果を來せしか、是れ他なし人間たるの生命及び存在を與へられしと同時に附與せられし所の一種の預想則ち言ふへからさる祝福を預想するに由て然るなり、

去りなから母よ、神の此恩賜(小兒)の外部の生命の保全にのみ注意する事過度なるときは動もすれは右に擧けし如き高尙なる感情及認識を埋沒枯凋せしむるの恐あ

り。然れとも是れ必らずしも避けがたきの事に非ず。抑も此の如き感情の由て生ずる所以は何ぞや。天の恩賜の者に地上の存在を與へんため卿が受けし所の大苦痛に酬ふる甘快なる報償として喚起せられしものなるか。將又卿が其兒の全生涯、若くは少くとも其成長して獨立するに至る迄の敎育期を通じて之に伴隨する所の高尚なる養育の事を深く其心に理會せしに由るものなるか。余は後說を信受する者なり。今余をして我生涯に起りし實際的事實を描寫して余の考ふる所を明述せしめよ、

余は昔童兒たりし時、天然に關する思想の將に醒覺せんとせる頃一日余が父の花園に往き生垣の下に於て五つの花瓣と五の黃金色の花蕋とを有せる小やかなる白薔薇の花を發見せしことありき。其花は畢竟一の野生花にして、其周圍には余が父に愛育せられたる數百の美花の時を得顏に咲き亂れ居るあり、彼花は目立たぬ處に於て人知れず僅に其蕾を破り居るのみなりき。然るに奇なるかな此見すぼらしき野花は他の百花に勝りて特に余の注意を惹き其花冠と其黃金色の花蕋とを見し時は余は實に無窮の深奧を窺へりと感じたり。爾來數年の間其開花の季節に當り余は常に數時間之を凝視せり。彼花は常に余に向て何事か語る所あら

んとするの風情ありしが、當時余は之に對して何事をも了解すること能はざりしかば自ら思へらく若し余にして此花に對して倦むことなくば余は早晩此花に就て何事をか發見するを得るならんと、

親愛なる母よ。顧ふに卿は此の如きの愛此の如きの眷戀此の如きの希望を以て卿の面前に花の如く咲き出でたる兒童の淸らかなる眼睛を見其星の如き眼中に何物をか(實は天を)發見することならん。余の花を凝視せしは酷だ卿の兒童を凝視するに似たり、是を以て余は卿を了解し卿はよく余を了解す。實に吾等は其愛するものを凝視することによりて直に互に相了解することを得るなり、

其後余は我家を出で愛する花園を離れ、暫しは彼の野生の花の事をも忘れ居たりしが後ち年稍長し一層天然に親昵するに及び再び彼の花を見出せり、噫當時余の喜果して如何ばかりなりしぞや。余は彼の早春開花して頗る見榮ある榛樹の傍に於て其花を見出し、昔に變らぬ熱愛と眷戀とを以て再び之を凝視せり。今や彼の花は其言語を發し余に向て「存在」てふ事の深意及び秘奥なる理法の開發を預知せよと教へたり。而るに其花も亦間もなく彼の萬物を掃蕩し去る所の生命の潮流の中に復び其影を沒し了れり、

然れとも是亦敢て永遠に沒し去りしには非さりき。後余が成人して自己の職務を自覺せる時、彼の花は再び余と相見ることを得たり。此に於てか曩には唯預覺によりて朧氣に心に浮びし善惡、正邪、實相、假相の認識の標號を今は千百年間存續する樹木に就て發見せり。噫昔余曾て童兒たりし時戀々として此花を凝視せし所以の理は五十年後の今日に於て始めて明白となれり。蓋し生命の眞義は余をして夙に預覺によりて生命の深奧に入り其法則と意義とを考思せしめしなり、母よ、余が此處に標號的に見しことを卿は卿の愛兒に就て實際的に考察し居るなり。去りなから余が其標號の眞意を全然明白に理解する迄に五十年を經過せし如く卿も卿の兒童が自己の生命及一般の生命につき告ぐる事を了解するに五十年を費すへきか、人生の大半既に去て餘命幾ばくもなきに及て夫等の眞理を認識するとも卿及卿の兒童に取りて何等の効用あるへきや。星狀の花若くは兒童の眼睛を凝視するの事は果して何事を敎ふるか。夫れ自己開發なる事は其花たり樹たり或は人たるを問はす一切の事物全體の存在の要狀として附與せらるゝ所なり。されば彼が十分圓滿なる人となるへきことは彼の圓滿なる花木が其初發に於て既に顯章せらるゝか如く其發端即ち初めて兒童を瞥見する時既に明に之を

見るを得へきなり、

之を約言すれば、母よ卿の兒童に對する卿の凝視は蓋し自然の約束によりて將來彼の中に完全圓滿に發達せんとする全人間性を發見せんとする預想と願望とに出づるものなり。然らは其所謂人性、即阻碍せらるゝなく削減せらるゝなくして兒童の中に明白に顯章する抽象的人性とは抑如何なるものなるや。卿の兒童は正に卿の兒、即ち人の子なるか故に過去、未來及現在に亘て生活すへき命運を有せり。彼は自己と共に過去の天を再び存在の域に活現せしめ、自己の顯章によりて天を現在に致し、又自己の中に未來の天を現はすを得るなり。卿の中に存する此三重の天は亦卿の兒童より卿に向て輝き出つへし、

動物は唯現在に生活するのみ、彼は過去及未來を知らさるなり。之に反して希望は未來の光景、未來の天を現はし愛は現在の天を開き、憂喜苦樂凡て內界に相一致する生命の感を叩發し而して信仰は過去より其眼を擧ぐるを見るなり。思慮深き明透なる眼を開て過去を見るとき誰か凡て善き事、誠なる事、聖き事、勇ましき事敬虔なる事に關して最も堅確に、最も神聖なる信仰を以て其心を滿されざるものぞ。何の處にか此の如く過去の事實を見る所の人にして見ゆる所のものを信ぜざ

るものあらんや。眞理を知覺せざるものあらんや。而して眞成の生涯を導くものは眞誠なる精神に非るか、

母よ此最も高尚神聖なる人生の三個の結合點即ち現在過去未來。及人生の三個の眞靈即信、望、愛は既に卿の兒童の無邪氣なる容顏に輝き出てゝ其光明を卿に注射せり。卿か卿の冢子及び其他の新生兒に就て思考するに當り卿の天性に若かく光榮を與るものは實に人間の最も高尚なる可能性が既に卿の兒童の中に含蓄せられ居ることを預想するがために非ずや。母よ此思想を煦育せよ蓋し之に由りて卿は卿の小兒の存在を一切の生命の唯一なると連結せしめ、其小さき者(小兒の三重の性を凡ての光、凡ての愛、凡ての生命の大本原なる神に聯結することを得ればなり、

ながを稚兒は
信仰と愛と望もて　天の開くを望みけり
生命と光明と愛の神　其靈を導きて
天津御國の民草と　ならしめ玉はん、惠もて

育兒歌の畫圖の說明

●手足の遊　（畫歌の部第十及十一ページ）

思慮深き温和なる母よ、生命は卿の感情、知覺及思想の中心にして又勞作、活動及行爲の歸する所の燒點なり故に生命の表彰なる卿の嬰兒の一擧一動は能く內部の調和をなす所の感情と勞作、思念と行爲とを卿の心中に喚起すなり。是を以て嬰兒の母胎を出て其手足を動かし初むるや否や其生命の活潑強勢に表現するを見ることばかり深き興味を卿の心に與ふるものは他に之れあらさるへし斯の如く嬰兒の動作、が卿の注意を惹くに當り卿若し偏見、習慣若くは錯誤の爲に其誘導開發の方法を誤ることなくば必ずよく其兒の自制力を開發し強健にし之を習練教養して遂に百事の基なる自育の道に進ましむることを得へし、

嬰兒既に清水に浴し清らかなる蓐に仰臥し新解なる空氣を吸呼して益其全身に力の加はりしを感じ或は其手を揚げて空氣を打ち或は其脚を伸はして四下を蹴

り所謂「手足の遊」を始むるや卿は母たる本能的自然の愛によりて早くも其兒が脚を伸して之を使用し其力をためさん爲めに何物をか求むることを感知し直に其自然の要求に應して手を出し或は胸を近け彼の小さき足をして且つ蹴り且つ壓さしめ以て十分に其力をためさしめ以て次第に其四肢の强壯を加へしめんと勉むるならん、

卿は嬰兒が自然に現す所の運動の法則に從ひ其强壯を助長せさるへからす、さらば啻に體力即ち外部の生命を養ふのみならす又感情、知覺及靈性等内部の生命をも發達するを得へく又其兒をして卿の愛と其周到なる注意とに感ぜしむるを得へし、蓋し此愛と注意とは卿が其兒の發達を助くに當り常に用ふる所にして卿の言行に和諧の調を與ふるものも亦實に此二者にあるなり、

漸次に醒起增加し行く所の嬰兒の力こそは卿の愛の焰に給する膏油なれば卿は必す其兒が此眞理を感知し次第に之を顯はすに至るを望むなるへし、圖解に於て母の傍に在る「ランプ」は母が終夜其子を看護するに當り用ふるものにして實に此

眞理の標號として見るを得へし、力を適當に用ふれはよく菜種、麻、罌粟等（國により造油の材料に種々あり）より膏油を搾取することを得るか如く卿も亦母の愛は善く嬰兒の力を養ひ夫をして調和開發を遂げしめんかために發揮し來るものなることを漸次其兒に知らしむへし、左の方なる搾油器械と其傍の安全なる所に植ゑられたる菜種とは卿か他日嬰兒に其眞物を示し得る時迄假に菜種より油を搾り出す器械は如何なる物との大略の觀念を與ふるの用をなすへし、

幼少なる兒童は男女に論なく其見る所のものを各其獨自の仕方にて摸擬するものなり、母は其兒等が未た十分理解し得る齡に達せされともおぼろげながらにも天然界に於ける愛の活動力を感知せしめんとて相伴ふて近傍の谷川に往けり、男兒は其手遊の車が水に驅られて迅速に回轉するを見んとて溪流に沿ふて其車を据るによき場所を求め、其弟は兄の傍に坐し目を大きやかに開き目眩き日光に手を翳しながら餘念なく兄の所爲を凝視し、妹は亦履物を脱して淸き溪水を徒渉し直に其目的す物に向て進み白砂を集めて堤、坡を作らんと試み、而して母は中心愛

に滿たされ坐して其兒等が同一の目的を以て同一の事物に其心を注きなからも皆それ〲に其禀性の相異なる所を現はすを視察し居るものゝ如し、蓋し母は今斯く水力を集めんと熱心し居る三兒の遊び振に照して其前途の生涯を概見し得るなり、即ち兒は其目的を達せんか爲めに用ひ初めたる其活力を將來常に用ふるなるべく、少女は其目的を確く心に把持し全力を之に献け其生涯と動作とにより て直に其目的に達するなる可く、其幼弟は勢力の性質を研究し天然の行動の法則を查察し之に由て其目的を達する可きを預見し得るなり、實にや彼の遊戲に餘念なき兒等は各豐に其中に藏める生命を唯現在にのみ現すと雖も母の心はよく現在、未來さては過去にも亘て活動するなり。去ればこそ彼の水際に踞して唯手を擧げ足を動かす外何事をも辨へざる幼兒を懷き居る母は今しも手に籠を携へ丘の半途に登り來れる貧しき婦人に向て「何處に行かるゝや」と問ひ「我兒は疾病に罹り居り妾は徹夜之を看護せさるを得ざるが故に此籠中の物を以て油に易へんが爲め富める水車屋の主人が許に行かんとす、夫のみならす我可憐なる兒に食物を與

へざる可らさるに妾は其料を持たぬ故之を以て米をも得んと思ふなり」との答を聞き何事か想ひ起す所あるか如く餘念なき我兒を熟視して此兒の前途の生涯は果して感謝を以て其母の愛に報ふべきや如何」と自問の言葉をもらせるなれ

●起臥の遊 （第十二、十三ページ）

全身を强壯ならしむる遊

卑近にして誰にも能く知れたる事が往々輕々に看過せらるゝは我儕の經驗上屢々見る所なり此短歌の如き亦これに非るか、人或は此歌は圖解に由て表明し得さるものなるか何故に此畫本中に編入せられたるかと問ふものあらん、然れども余が此歌と遊戲とを此に加へしは抑故ある事にて嬰兒の體育上實に看過すべからさるものと信じ且、又たとひ圖解なくても慧敏なる母は題詞（歌の部の上段にある分をいふ）に由りて直ちに其意を悟り其遊戲の仕樣を發見することを得可しと思惟すればなり、今其大樣を言はん卿は其兒の臥せる「テーブル」又は臥床の前面に立ち其兩手もて嬰兒の背を抱き少しく枕より持上げて半臥半坐の態度に至らしめ而して後ち嬰兒の全身に微動を與ふる程の加減に其手を再び穩かに枕上に落とす可し、或は又嬰兒か臥し居る時其小さき兩手又は兩腕を握りて穩かに其體の上部を引き起し殆んど箕坐の態度に至らしめ而して後又徐ろに其手を放す可し、されば嬰兒は其

全身に微動を感じつゝまた舊の如く仰臥の位地に復らん、斯の如く卿の注意と愛心とに保護されて後方に倒るゝ事は大に嬰兒の體力を增すの益あるのみならず又彼をして自己の強壯を知覺せしむる最良の手段となるなり、然れども卿は此後も尚其生長しつゝある兒童をして斯る愛深き注意を受くるにあらざれば往々恐るべき跌倒に陷ることあるを感知せしむる數多の機會を有し之を利用して其兒を教養せざる可らず、即ち彼降雪の夕前丘に上りて橇を弄ぶの時未だ能く橇の行先を見て之を導くの眼力なく又之を左右意の如くに運するの腕力なきを以て兒は遂に橇外に跌倒して微しく其足を傷けたりと假定すべしかゝる場合には直に「兒よ如何に爾の視力を用ふ可きかを學び又其體力を養成せよ、さらば爾は巧に跌倒の危難を避け得可し」との教訓を施し得べし、又寒威凛烈の朝後池に遊て氷上を滑るの時兒は放心して四下を回視し脚に任せて其行かんと欲する所に行けり、而して忽ち倒れたり然れども幸にして其手に微傷を負ひしのみなりと假定せよ、疼痛直ちに彼れを戒めて曰はん「兒よ更に一層注意せよ而し

て能く其足と脛との運動を制し復跌倒する勿れ」と、又或時一少女は少しも傍視せず戰々競々深く注意して双手に平鉢を捧げ來りしに圖らず之を取落し又童男は其捧け來りし茶碗を落したりと假定せよ是全く其手の指の力未だ充分に强からざるを以てなり、於是か「如何に堅忍の精神あり且つ事に巧者なるも其力强からされは到底中途に失墜するを免かれざるなり」との教訓を得可し、されば卿もし必らず其兒に教る所あらんと欲せば能く實際の生活より言葉の圖解を得可きなり必ずしも此書に縷刻せし圖解なきを憂へざるなり況んや此の如き遊戲に由りて與へたる結果は永く兒童の心中に印して磨滅せざるべきおや

譯者曰橇に乘り氷上を滑る等の遊は我邦には稀なる事なれど本文の趣意を適用すべき場合は少なからず例へば雪の朝高屐を履て跌倒れたる時の如き是なり以下此類少なからず、要するに本文は唯一二の例を示せるに過ぎざればよく其の趣意のある所を察し之を實地箇々の場合に應用せんこと最も緊要なり

●風車　一に風見の鳥　(第十四、十五ページ)

手及ひ臂の關節を運動する遊

嬰兒の前腕を出來得る丈け垂直にし其手を同し方向に伸張する時は拇指は頭及頸となり他の四指は尾となり而て平たき掌は體となり宛然雄雞の形を成すべしかくして其手を彼方此方に動かす可し　譯者曰圖解には烏を以て雞に代へたり是全く本邦の習俗に從へるなり

此遊戯は此の如く簡易なり然れども能く嬰兒をして樂ましめ幾回之を反覆するとも其快味を失はず。嬰兒は未だ一語だも語り得ざるなり、去ども母か「如何樣に風見の雞が旋轉するか」又は「風見の雞を旋轉して見せよ」と云ふ時は兒は實に愉快と熱心とを以て其小き楓の如き手を動すなり、加之尚深き興味の其底裡に存するを見る、試みに嬰兒の前面に少許距りて立ち一物を動かし見よ動きつゝある其物よりも、何者が之を動かすかと其原因を發見する事が反て一層の快味を嬰兒に與ふるに非ずや、嬰兒が此の如く愉快に且つ熱心なる所以は其手の運動が常に其筋力

發作の感覺に伴ふを知り原因と結果の聯結を感知するが爲めなるを知らざる可らず、見よ兒は既に動體の中には必らず之を動かすの原因即ち之を動かすの勢力存すとの事實に關する知念を有する事を示せり而して直ちに凡べて活動する物には必らず活動する所の勢力其中に存せさる可らすと信ずるに至ては亦是れ自然の歸結なり

少しく風ありて殆んど暴れなんとするの日に家の前庭に子供を伴ひ行く可し、何地にか身を忘れて我を愛し吳るゝ母と共に出で行くことを好まざるの兒あらんや、聞けよあの竿の上なる風見の雞の鳴ることを風は其尾を右に左に動かしつゝあるなり、時に雌雞は其誇り貌なる雄雞に伴はれて來れり、然ども彼等は風見の雞の如く全く風の自由にはならず、彼等の尾は風見の雞の如くに風の儘に靡き居らざるなり、又如何に風が懸け曝され居る衣類を吹き鳴らすかを見よ、衣類は恰も强き風の物語を語るに似たり兒等は如何はかりか此風の物語を喜ぶやらん、男兒は浴せんとせしか風に妨げられて果さず其手巾を長竿に結び空中に之を振り舞し

つゝ遊べり、少女は肱を伸ばし張りて手巾を持ちて遊び亦等しく喜こべり、他の兒は紙鳶を飛ばして更に又喜べり、「カツタ」「カツタ」と彼處に鳴るは果して何物か是れ風が風見の鷄の尾を迅速に吹き轉はして此音をなさしむるなり、大なるものゝ爲せしことにして小なるものゝ摸擬せざるは鮮なし(故に生長せし者は少者の面前に於て其爲すことを愼まざる可らず)一兒は手に紙にて作れる風車を持ちて走り來れり、見よ如何に彼が走るにつれて風車が迅く旋轉するかを、彼處に居る母は辛ふじて其少女の暴風に吹き倒さるゝを護り得可し、然れども大人は跌き倒れざる樣に自ら能く其體の平衡を持せざる可らず、

「母よ今日は風強くして何物も之が爲めに吹き靡かさるゝなり、見よ如何に姉樣の頭髮が吹き靡かさるゝかを、風は何くより來りて斯く萬物を吹き靡かすか」「我子よ予今爾に之を告ぐるとも爾ば之を解する能はざるべし、予は爾に告げて其風の原因は空氣の壓力若しくは其密度と溫度との變化に在りと云ふとも爾には唯外國の語の如く聞ゆるのみにして何の意味もなかるべし、爾は到底予の意味を了解

せざるべし、然れども我兒よ、よく考へ見よ我等の眼には見えねども此世界にはいと大なる勢力ありて多くの大なる事小なる事を成し遂げ得るなり此理は爾にもよく分るならん、吾儕の周圍には眼には見えずとも我儕のよく知覺し得べきもの尠からず又吾儕が知覺し得るのみならず眼にも見るを得れども其何故なるかを言語に述べ得ぬものも亦なきに非ず爾は爾の手の運動を見るを得可し然れども其手を運動せしむる手の中の勢力は爾之を見ること能はざるなり故に爾は爾が今感知する所の總ての勢力を考へ且つ養ふべし、竟に爾は縱令眼以て見る能はずと雖ども其何れより來るかを更に善く了解するを得るに至る可きなり」

●皆すんだ　（第十六、十七ページ）

手の關節を動かす遊

手を乍ちにして地平線の位地に、乍ちにして垂直の位地に轉することは物又は人の既に去て今は此處に存在せさることを現すなり。此遊戲亦手の關節を運動せしむる遊戲なるも其圖解に於ても其意味に於ても前章に示したるものと全く正反對を爲せり、即ち前章には十分の充實あり此處には空乏あり、前者には連續あり此處には斷絶あり、彼は現在に關し是は過去に屬す、之を要するに二者の相異は一は現に在るものに關し一は曾て有りし事に關するの點に存す、夫れ人何の處にか先きに在て今や乍ち無きの現象を見さる事あらん、在りし肉汁は既に盡き滿ちし皿は既に空しく輝きし燈光は乍ちにして既に消え失せたり、之を對比して教訓を得せしむる本章の意味實に此に在り、

父に伴はれて野に出で行ける犬は既に其食物を食ひ盡せしが未だ厭かさるに似たり然れども既に何物もあらざるなり。兒童は渇けり渇て姉に飲を求むれば「既に

無し」と答へ、空杯を倒にして之を示せり。兒童は此意外なる答を不快として思はず其顏を反けゝれば敏捷き猫兒は其隙を窺ひ徐かに匍匐上りて其傍の「パン」を奪ひ去れり。兒童はそれとも知らず其「パン」を得まく欲し直ちに反顧かへりて之を求むれば亦「モー無し」と呼ぶの外なし、

一人の少女は其鳥に食餌を與へんとて籠の戸を開けり然るに其下に在る空杯に姉の姿の映寫りしを見るや何心なく戸を閉ぢ切らずして脇目せり「汝の鳥は那處に在るか」「アー鳥はなし既に飛び去れり」兒は少女を慰めて曰く「予に伴ふて來るべし予は彼老樹の梢に一つの巣を發見せり、其巣の中には多くの鳥兒あり之を獲るときは失ひし一羽の代りに數多の鳥を得べし、來れ來れ」と於是て兒等は鳥に心を奪れて一心不亂となり飢ゑたる犬が彼等に隨て來り其手より「パン」を奪ふて食ひしにも氣付かずして只管樹梢を望んで立てり、既にして其手に「パン」なきに心付て呼び曰く「モー無し」と其時兒は攀ぢて既に樹上に在りされども鳥は皆飛去りて一羽も無し」他の兒忽ち答へて「されど予は一羽の小鳥を得たり、見よ此の帽子の下を

之れを妹に與へなば其喜は如何ならん、アー嬉れし此處に美しき覆盆子あり予は之を味はん、愛らしき小鳥よ爾は暫時其暗き所に忍び居るべし」と、忽ち風あり帽子を吹き覆せば鳥は早くも遁れ去れり、兒は遽てゝ引き反し來るも既に及ばす唯曰「アゝ小さき鳥は既に無し」と、

是に於て母と共に此書を視居たる小兒は言はん「母よ希くは再び此書を私に示し玉ふこと勿れ一人も其欲する所のものを保持し得たるものなし」母曰く「我子よ今や爾は何物にても永く之を保存たんには深く意を注ひ之を大切にせざるべからざることを悟りしなるべし、爾は爾の熱心の爲めに自らを失ふ勿れ、若し一時に一事を成さんと欲せば嚴重に矩規を守らさるべからず、少兒は渇を濕す水なきに失望して「パン」を忘れ少女は不注意に由りて其秘藏せる鳥を遁せり。少兒は小鳥を其巢より捕へ來て之を籠中に幽するの權利を有せず、見よ彼等は其活力と勇氣とにより自己の自由を求め得て蒼空高く飛び去れり。空望に心を奪はれし小兒は犬の爲めに其「パン」を奪はれ。小妹を喜ばせんと欲せし折角の親切は覆盆子の誘惑に負

けて水泡に歸せり」子は忽ち叫て曰く「母よ飛び去りつゝある小鳥を再び私に眺めさせ玉へ」

●味の歌　（第十八、十九ページ）

此遊戯と短歌とは目に見ゆる物體よりも更に吾人の生命に密接せるものに關するを以て亦起臥の遊戯の如く別に圖解を附せざるなり、夫の愛に富める母か其兒と遊ひ戯れつゝ人生最要のものを遊びの中に寓しながら其愛兒に菓物など與へて愉快らしく手眞似しつゝ「余にも之れを食べさせよ」「爾その林檎を食べて見よ、實に甘味なり」など戯るゝを見るもの誰か一種の快感を催さゞらん、

來れ小供よこゝに來て、　白き覆盆子を手に取り見よ、
汝はたのしく覆盆子をかみ、　多くたべんと口を開く、
猶酸き甘きが交れども、　食ふべき時は今なりと、
汝が心には思ふらん、

味官遲鈍にして食味の佳否を辨する能はざるものゝ不幸は大なるかな、されば兒童の教育に於て五官の習練程大切なるものは無かるべしと雖ども其中特に味官

を習練して其官能を活潑鋭敏ならしむるを以て最も肝要なる事と爲すなり、況してや其習練の如何は頗る其心靈の發達に影響する所あるおや斯る次第なれば如何にして味官の習練をなすべきかは卿の宜しく心を留て考ふ可き所なるべし
凡そ物には種々樣々の性質備具りて或は人を利益し或は人を毒害する事ありと雖ども其性質は深く其中に潛伏して一見吾人の心に呈露するものに非るなり、然るに五官なるものあり能く其潛伏せる內性を顯露して之を我が心識に活如たらしむ是に於てか吾人は預め物の利害を察して之が防備を爲すを得るなり是實に感官の妙用にして其深意の存する所なり即ち味官の如き夙に食物中に在る一種不可思議の無形物即ち味なるものゝ佳否を辨し其未だ咽喉を下りて胃腑に達し身體を傷はざるに先ち既に其身體に關する利害如何を察知し有毒の物を棄てゝ專ら滋養ある物を取らしむるを得、蓋し五官の鍊磨に由りて能く有害物を避け專ら健康上に缺く可らざる物品を撰擇するの力を得るは實に造化の妙用なりとす、彼の毒草毒菓が多く其形色と臭氣とを以て其內性を發表する樣を見れば一層造

化の智と愛とに驚かさるを得ず、見よ有害の植物は多く陰暗幽鬱にして皺縮したる樣を呈するを、たとへば蛇覆盆子の實は圓く滑かに且つ美なれとも其葉と果との色は自ら其毒性を顯すか如し。會々外形よく內質を隱蔽して一見其毒の有無を識別し難き塲合には又一種嫌嘔の臭氣ありて容易く其有害なる性質を知らしむることあるなり。又通常滋養となる可きものも過食して健康を害すべき時は味官は次第に飽厭の氣を生し遂に之を嫌ふに至らしむるなり、たとへば多く砂糖を食するときの如し、

五官の習練は啻に此の如く體育上に必要なるのみならず又心靈を發達せしめ意志の作用を强むるに最も缺く可らさるものなり。何となれば物體の性質は悉く其形狀大小より香味色聲等に至る千種萬別の關係と比較とに由りて知り得らるべきものにして、五官は即ち之を知るの中保なればなり、若し此の中保にして遲鈍なる時は何に由りてか外界の事物に接して能く精確なる印象を得正しき觀念を造くることを得んや、夫の「語れよさらば汝の何人なるかを告げん」との俚言の如く物

と其性質とは唯五官の語る所に由りてのみ之を識るを得るなり、故に五官は人を適當なる心靈上の智識に導く案內者と謂ふを得可し、母たるもの豈兒童の味官を習練することに意を用ゐずして可ならんや、

既に味歌の題詞に於て說明せんと勉たる如く感官の習練は森羅萬象の類別比例及ひ其相互の影響特に其人類に及す影響を認識するのみならず又其身軀修養の度及び各物成熟の程度を確認するに於て一層大切なり。今若し人類生活の現象及び其關係を明白に確實に更に又廣く觀察し來る時は物の未た成熟せさるに之を濫用することは猶未熟の菓物の消化機を害するが如く、個人にも社會にも共に大害の根基たるなり、さらば一家の母たる卿は其家族と子孫との幸福を計らんと欲せば須く其兒の活力新に動き事物を用ひ始るに當り早くも未熟より成熟に達する發達の初階を觀察せしむるのみならず、又凡て成熟せざる事物を用る事に付て自爲の嫌惡並に肉身的、心靈的及社會的生活に於る此嫌惡の破壞的反動を知しめざる可らず、此の如くして始て卿は人類の最大恩人の一となる可き也

●香歌（第十九ページ）

物體中に隱伏せる一種無形の性質を探り知らんと欲せば感官中特に味官の習練に注意せざる可からざることは前章に於て既に其概略を說明せり。此章にては專ら味官に密接して常に其作用を佐け互に其足らざる所を補ひ以て一層完全に物の性を顯露し容易く害あるものを避け益あるものを取らしむる嗅官の作用及び其習練の必要を語るべし、

偖身心の關係は極めて親密なるものにして心靈の發達の肉體の發達に伴ふことは疑ふ可らざる事實なり身的存在は何處に終りて而して心的存在は那處に起るか其限界を知るは容易に非ず。身的作用の心的作用に、生活的作用の智力的作用に、本能的作用の道德的作用に何時しか混溶し去るは宛かも水天相接して其際を知る可らさるが如し、是を以て互に相待ち相助けて完全なる作用をなす所の嗅味兩官の習練は益々智力と德性の開發に缺く可らざるを感ずるなり。何となれば活潑なる智力は健康なる身體に存し高尙なる德性は本能性の發達に伴ふて進步する

ものなればなり。視味兩官を用ひて尚判定するを得ざる物も嗅官の助けを借る時は容易に識別し得ることは已に論ぜり、健康に害あるものは啻に其形色を以て内性を顯すのみならず、亦一種嫌嘔の臭氣によりて其毒質を知らしむるなり、啻に色に於て味に於て臭氣に於て然るのみならず聽官亦其不諧の調音に於て金屬の性質を知らしむるなり、されば益々感官習練の非常に大切なるを知るべし。加之各物其物自體には營養に資す可き良性質を有するも之を用ゆる過度なるに由て反て害毒となる事あり彼馥郁たる清香は鬱氣を散じ心意を爽快ならしむるものにて床上一片の梅花は能く幾多の來客に快感を與ふるも花香あまりに鬱積して其室に滿つること度に過ぐる時は反て嫌嘔の氣味を催し大に健康の害となるものなり。過度は常に厭嫌を生じ厭嫌は健康の爲め過度の避くべきを忠告するものなり。ア、母よ卿は香味に關する遊戲若くは物語の際に能く此事を兒童に教へざる可からず。今迄多くの香氣馥郁たる美花を聚め餘念なく遊び居りたる小兒は忽然呼て曰く「母よ余は頭痛を感ず」と卿は驚て「何を爲して遊びしか」と問へば兒は「たゞ美麗

なる良き香の花を多く折り集めて居りしのみ」と答ん、是の如き時は卿は教へて曰ふべし「アー夫れこそ頭痛の原因なれ、かく多くの香氣強き花を集むる時は其花香室内に鬱積し鼻を徹して頭腦を刺激するが爲め遂に頭痛を起すに至りしなり、たとひ健康を助くべきものも若し其適度を過す時は反て大害を釀すの恐れありさらば常に鼻口の慾を愼まざる可らず、且つ自己の慾を滿足せしめん爲め多量の美花を自室に集め他人をして之を得る事能はざらしむるは是れ私慾にあらずや」と小兒は曰はん、「然し母上よ、卿が私を愛し玉ふ如く植物及花も私を愛する樣に思はる」と、

暗きを出でゝ明に入る、
笑顏やさしく咲き匂ふ、
わが耳近くさゝやきつゝ、
生活するかを語るなり、
平和は我にも分たれて、

道をば彼等ぞ得させける、
花は心をなぐさめて、
如何に其身の年々に、
汝が身の持てる美しき、
我が心をぞ清めける、

危險に遠く我を置け、
汝が名はすべて皆知れり、
汝は姿と色にのみ、
「御身は疲れざるべし」と、
其詞こそ世にたぐひ、
夏の空にぞ滿ちわたる、
敎へよ其花いざ我に、
花の中には光ある、
美しき花よ美しき花よ、
高きに向ひて猶遠く、
いと親切に永久なる、
あはれ愛もて離れ得ぬ、
神に我身を導くも、

誑惑來らば戒めよ、
汝が方言を敎へてよ、
思ふ心をあらはして、
我に親しく語るなり、
まれなる香の如くにて、
誠を愛する其事を、
かく美しく咲きにほふ、
精神こもれるもの多し、
汝は弱りし我を慰め、
窮めん事物を敎ふれば、
我守人と賴むべし、
汝と我とを作りたる、
唯是れ汝が身のめぐみなり。

汝が一枝を折らしめよ、
樂しましむべき其爲に、
しるしに贈らん其爲に、
死さへ汝が身のかうばしき、
汝が身はこゝを去とても、
慕ふ我をぞ慰むる、
母が面影の記憶なれ、
其子を惠み得しならば、
あゝ汝が心に我記憶、
なほいつまでも親切と、
戒めあたへよ我ために、
我身の學課よ教訓よ、
入るべき門を明けおきぬ、

我最愛なる父母を、
我感恩と調和との、
世に恐ろしき刈人なる、
呼吸はとゞむる能ふまじ、
香は猶空をさまよひて、
そのなつかしき姿こそ、
母も其そば離れずに、
死すとも嬉しかるべきに、
とゞむる事は我ぞ知る、
愛と誠を盡すべき、
是こそ汝より受け得たる、
なほ〱語れ我耳は、
たゞいたづらに我は又、

汝が身を手折ることはせじ、かくれしいばらに刺されつゝ

悔まん時の來ん故に、

「こつと、こつと」（第二十二、十一ページ）

腕を動かし練習する遊戯

此の遊戯は容易く實試し得らるゝものなり。圖に示せるが如く小兒の片手を取り片手を自由にして母の膝上に立たしめ其手を時計の振子の如く前後に運動せしむべし、或は左手を以てし或は右手を以てし又左足或は右足をも亦此の如く交互に振動せしむ可し、斯くして偏することなくんば全體圓滿に發達して健全なる兒となるを得可し

育兒上經驗ある世の母親に對し更に圖面の説明を爲すは恐くは釋迦に説法の嫌を免れざる可し、蓋は育兒に關する吾人の智識は元、世の母親の周到懇切なる擧動に注意觀察して得たるものなればなり、

然れども茲に注目す可き一事あり凡そ其何種たるを問はず苟も時計と名けらる可きものは常に深く兒童の注意を惹くは實に奇に非ずや。今其所以を探究して世の母親の參考に供するは亦價値なきことに非る可し、兒童が斯くまで時計に意を

惹かるゝは亦他の遊戯の如く深き意味の其中に蘊蓄するありて兒童に發達す可き肝要なる將來の性質を預言するものに非るを得んや。要するに兒童が時計を喜ぶ所以のもの其理由一にして足らざる可し、嘗て小學校に通ひし頃柱頭の時計の振子が分秒を違へず不斷あちらこちらへ動くを見て運動法則の一定不變なることと其振動の韻律に協ふことを感じ。又時計の振子が「コッチ、コッチ」と調子よく迅速に響く音を聞きしとき大に吾人の好奇心を刺激せしを思ふときは是等は必ず時計が兒童の注意を惹く一二の原因たらざるを得ず。卿は言はん時計の回旋機械の蠕動及び其内部構造の精妙こそ深く兒童の注意を促すものならめと、亦一理ある説なり、然ども是畢竟幾多の原因中の一に過ぎざるのみ。若し兒童が時計の遊戯を好むの理由以上の如きに止らしめば何故彼の日時計の如き物を作るを好むか、日時計に於ては日晷が音も聲もなく殆ど感知す可らざる程徐々に移動するを見の外別に運動の見べき無に非ずや、故に吾人は兒童が時計を好む第一の原因は兒童の心中に深く潛んで未だ醒め動かざる一種の性即ち時を重んずるの天性に根基

するを確信して疑はざるなり。是說や啻に兒童及び其他の人々に損害を與へざるのみならず反て大に益する所あるを知る、何となれば凡ての人皆時を利用するの必用を感ずればなり。されば嬰兒の搖籃に在るの時より善く時を守り時を用ゆるの習慣を養成する程人生に大切なることはなかる可し。兒童既に好で時計の遊びをなすに至らば善く此嗜好即ち時計に注意するの心を利用して時間を貴重するの天性を喚起し時間に就て正確なる觀念を與へ之を善用するの習性を成さしむるは最も緊要のことなりとす、

若しも兒童が此小さき繪畫を示されんことを乞ふときは、卿は直ちに言ふ可し「此小さき猫兒は何をなして居るか、傍の見る眼にさへ快き程自ら其身を洗ひ淨め居るに非ずや彼は今しも其友を訪ふ可き時刻の來らんとするを知りたる樣子なり」と。斯くて卿は尙ほ言ふ可し「兒よ來れ今將に來客あらんとす、宜しく沐浴して之を待つべし父の歸り玉ふ時其身の潔淨なるを譽めらるゝ樣に爲すべし美麗の花や奇麗の鳩が澤山來れり、

我兒は清く美しく、　あるべき事を忘るゝな、
其うつくしき訪問者と、　ひとしく其身をなさんには、
併し愛兒よ爾には絶えず來客あるなり清き日光も、光る星も、冴え渡る月も皆爾を愛して爾を見んと願ひ居れり、

彼等は好みて愛らしく、　清き我子をたづね來ぬ、
されど我子よもしや汝が、　清くあらすばかゞやける、
彼等は爾をいとひつゝ、　彼等も爾も諸共に、
いとゞ不快を感ずべし、　されば我子よ我愛よ、
爾何處に行くとても、　ゆめ怠りぞ清淨を、
其身をきよくなすことを、」

と今此圖を見るに恰も五人の兒童が時計を弄して遊びつゝあるなり、此兒童は正に善く其時を追ふて其爲す可き事をなし得んが爲め時を知らんとを欲する五本の指を表すに似たり「來れ我兒の愛らしき五指よ、來て圖中の五童の爲す所を學べ」

●草刈の遊（第二十二三ページ）

腕の運動

先づ小兒の両手を出さしめ其前腕を水平に伸ばし、掌を下に向け、指を少しく揚げて下方に屈曲せしめ又母は掌を上に向け其他は全く相同しき姿勢を爲し而して母子双方の両手指を相接せしむべし此の如くにして後此双對の腕を同時に均しく前後に動かすこと草を刈るが如くなす可し此の如くするときは此の遊戯は特に前腕の關節を運動し且つ小兒の姿勢を眞直ならしむるの効あるなり、

母たる者が凡そ諸般事物の中外觀上直接に小兒に關係なきものは其内實に於ても亦相關聯する所なしと思考し絶えて人生の大連鎖の全體を洞看し得ざるが如き僻陋膚淺なる事程小兒の幸福特に其心情の教養に損害あることは非るなり。聰慧なる母は既に前章の遊戯に由りて此損害を避くるの用心あるを得べし。「母よ余は空腹になれり」と小兒が呼ぶときには「宜しく厨房に往て食を得可し」とか又は「此に二錢あり宜く麵包を買て來るべし」とか生涯の間に幾度か言はざるを得ざる可

し母が此の如き言を爲す以前に既に成る可く早く滿足せしめざる可らざる小兒の需要と之に應ずるに必須なる事情との關聯を明白に理解せしめざる可らざるなり、

而して此等の關聯を明白ならしむる爲めには閑靜和樂なる田舍の生活又は繁劇多忙なる都市の生涯等凡て農工商業に關する美麗なる圖畫を擇びて之を集め之に簡短なる實話を加へて小兒に示しなば能く其目的を達するを得可し今此に集めたる圖畫に就て左に少しく之を說明す可し、

若し小兒が此の圖の說明を求むる時は此歌と圖とに由りて其甘味きパンを喫し其雪白なる牛乳を飮むを得るは啻に母君と牝牛とパン燒く人との惠によるのみならず是實に萬物に生命を賦與し常に之を保護り玉ふ萬物の父の恩惠に出づる事なれば常に之に感謝せざる可らずてふ事を敎ふるは決して困難には非る可し、世界は實に天父の意匠に由りて雨露あり晝夜あり四季あり地は之に由りて牧草を生じ牧草は動物を養ひ動物は人類を養へり、小兒をして此理を知らしめなば必

ず天父の恩惠を感知するに至る可し、且つ圖に示せる如く小兒をして大人が生活の爲めに爲す勞働を眞似せしめ特に逐次に其小き花園を自己のものとして耕さしめ植物の熟するに及び其實を穫せしめ、實際雨露日光の生物に及ぼす勢力の如何に廣大なるかを察し地と萬有を統轄する神の律法を知らしめなば更に一層感謝の念を加ふるなるべし、

たとひ兒童が、今日は尙ほ、此圖の下方に在りて跪いて乳樹の花に結べる鏈鎖を引く所の彼の童男、童女の未だ全く其鏈環を結び終る能はざる如く其生涯の鏈鎖を完結して其一貫の理を悟ること能はざるも、焉ぞ知らん異日智力の大に進歩し思考力の益發達するに及びよく此一貫の眞理を發見して其奧義に通ずるを喜ぶの日なきに非るを。童男の傍らなる左の樹は彼及其他の敎育を受く可きものとに謂て曰く「注意せよ、注意せよ、生來善良なる根幹より下賤、卑劣、虛僞、欺騙の惡芽を生ぜしむる勿れ、否らざれば之れより出るものは唯枯萎したる枝にして徒らに乾燥無味の實を結ぶの外、何物をも生ずること能はざらん」と。童女の凭る所の右樹は彼女

及其他の成長の途にある小兒とに謂て曰く「注意せよ、注意せよ、不學と無思慮とに由りて將に伸びんとする生命の絶頂なる活ける注意を剪り止め將に發達せんとする萌芽を毀傷ふ勿れ、否らざれば幹太く枝伸び葉繁るとも遂に花を開くことなからん、況んや實を結ぶことをや」と。然るに此童男童女は何故樹を背にして坐るや、哀しひかな此樹の教ふる大切なる教訓は此經驗なき童男童女の心裡に一の反響をも起すこと能はざるなり。母よ母よ卿は何事にても兒童の注意を惹くものは其害惡ならんかを恐るゝに及ばざるなり、特に母と共に健腕を振て草を刈る快活なる童男と枯草を積みたる車を追ふて走る活潑なる童女とには更に氣遣ふ所あるを要せざるなり、

●雛を呼べ　（第二十四、五ページ）

此に母と兒が手招きを爲すの狀を爲し居るは別に說明の要なし此の如く手指を動かすに由りて兒は其手指の强壯と巧錬とを得るなり。母は前章の說明を記臆するなるべし、見よ母の腕に憑る强壯にして肥え太りたる嬰兒が母の招き止めたる雛兒に凝視し居るを。思ふに今母は其兒を戶外開豁なる處に携へ行き新鮮なる空氣に浴せしめ所有外界の諸物に接して彼の內に有する新生命を明白に知覺せしめんと、欲するに似たり、其時他の群兒も亦其娛樂を共にせんとて母に追隨し行けり、此の如く愛情の溢るゝ慈親に追隨するは誰れしも好む所なり、兒童に在ては特に然り、見よ如何に健康と愉快と思慮深き性が此群兒の顏面と擧動とに溢るゝかを、圖の右側に三兒あり其中央に在るものは跪づきつゝあり。淸新なる天然の生命は如何に磁力の如く彼等の心を惹くよ、二人の少女の後ろに立てる健康なる兒は雛に全く其心を奪られ其娛樂を獨り此二童女と共にするのみを以て滿足せず、更に顧みて樹邊に快活に遊び居る他の三兒を招かんとせり、然れども彼等も亦其眼

前に在て彼等の心を惹く所の景色に心を奪れ其場を去るを好まざる樣に見ゆ。又圖の左側を見るに一兒は群雛の擧動を一つも見失はざらんと勉むるもの丶如くひたすら其身を前方に屈し仔細に群雛の遊び戯る丶を眺め居り、又一の童女は何物かを愛撫したしとの願望あるが如く熱心に母鷄を呼べり、之は母雞が其雛の何れかを殘し去らんことを恐るればなり。此の如く群兒は各自銘々天然の明鏡に照して我に在る生命を映寫し之を知覺することに由て更に我が生命を强むること宛かも嬰兒が其慈母の眼中に自己を映寫し而して之を知覺して更に其生命を强むるが如し。さらば凡ての子女は須らく此童女の傍らに淸らかに又勇ましく攀ぢのぼる蛇麻の蔓の如くいと快活に生長し遂に將來に於ては今此に在る子が其淸蔭に就て天然の生命を樂み居る此亭々たる大樹の確然搖動せざるが如く泰然樹立する所なかる可らざるなり、

●鳩を呼べ　（第二十六、七ページ）

大抵の母は小兒と共に坐するに當り常に其兒が己の腕に抱かれ居る際屢目擊せる事物を摸して遊び以て其兒を喜ばさんとつとむる者なり。母は鳩又は他の鳥雀が小兒の方に跳舞し來るを表はさん爲め其五本の指を以て交々机上を打ちつゝ漸次小兒の方に近くなり、小兒は之に心を惹かれ遂に其動作を眞似するに至る、此の如くして知らず識らず手指の關節を運動することを始むるなり、生命は能く生命を牽引す、前回に於ては吾人は天然の生命が能く小兒の心を牽引するを見たり、此の如く今は天然の生命特に鳩若しくは雀の生命が小兒の愛らしき生命と相牽引するを見るなり。見よ如何に馴々しく鳩が小兒の傍らに來るかを實に彼等は互に言語を了解し得るもの、如く見ゆ、彼等は互に其言語を了解し得ざる爲めに反りて更に互に深く相知る所あるもの、如く四方より彭翼しつゝ小兒の周圍に集れり。鳥雀能く小兒の言語を曉るに非るなり、然れども亦互に深く默契する所のものあるに似たり。小兒の母に於ける往々亦斯の如きあり。小兒未だ母

の言語を解する能はざるとき反て能く母に從順なること往々あり。是れ抑何の故ぞ、鳥雀に往て其理を問はんか、是れ他なし言語と實物、實物と言語、行爲と言語、言語と行爲彼等に於ては同一義にして更に異なることなければなり、

●魚（第二十八、九ページ）

小兒は母の左腕に抱かれて膝蔽の上若しくは母の前なる「テーブル」の上に坐す此時母は其兩手を地平の位地に伸して稍相平行せしむべし、斯くて其手指を別々に或は曲げ或は直くするときは魚の游泳の狀を摸するを得るなり、今此遊戲の意味を布衍して之を左に述べん、

小さき鳥と小さき魚とは共に小兒の心を尤も喜ばしむるものなり。其理蓋し鳥の空中に於ける魚の水中に於ける何れも其周圍に在て其運動を窒碍するものなく無碍自在なるが如く見ゆるに由るに非るか。此無碍自在なることは兒童に對して

は實に名狀す可らざる價値ありて深く兒童の心を引くの力あるものなり。分明自由潔白。及び無碍自在の運動、此等は實に兒童生涯の歡樂の基礎にして兒童の幸福と感ずる所は此に在り、其身體の强壯を增し其全身の開發を促す所亦此に在るなり。然れども小兒は何れも小鳥を捕へ小魚を漁するを好むに非ずや、此嗜好は此の自由を愛し自動を樂しむ本性と相戾るなきやの嫌なきにしもあらずと雖どもこれ亦決して然らず小兒は其無邪氣にして潔白なる心より唯小鳥を捕へて其快活なる飛舞を得、小魚を獲て其壯勇なる游泳を得、此両者の自由にして活潑なる自動と自決とを自家に得有せんと欲するの意に外ならざるなり、是れ小兒が好んで魚鳥を捕獲する所以ならんか。然れども眞正の不羈自由は決して斯の如く唯外物を捕獲せしとてこれに由て決して得らる可きに非るなり、自由の存在は之を我內より得ざる可らず、小兒の喜ぶ所の潔白は唯努力して之を內に得可きのみ。さらば卿若し潔白を其兒に得せしめんと勉むるときはたとひ其始めは朦朧たる天性の萌芽に止まるも終には其兒の爲めに內部の平和と眞成の歡樂の基礎を限りなく据

ゆることを得可きなり。卿は須らく此目的の爲めに小兒の無邪氣なる欲望即ち潔白と快活なる活動とを欲するの念を利用せざる可らず、

小さき妹は其兄を呼んで「兄上よ私の爲めに其處に勇しく泳で居る彼の小魚を捕へ玉へ、アー彼處に、アー此處に、アー今曲れり、アー今眞直になれり、此は實に可愛らしき魚なり、若し私が此の如くに自由自在に出沒、隱現、去來意の如くなるを得ば試みに阿兄を困却せしめて見ん、阿兄希くば一尾を捕へ玉へ」(兄)ソレ一尾を得たり、緊つかりと握らざれば逃げ失すべし」(妹)阿兄よ、魚は既に動かざるなり、唯眞直に其體を伸ばし居るのみ然れども尚ほ生きて腮を動かし居るなり、草の上に置かば再び動くならん、ア、既に棒の如く硬くなれり、彼の强壯なる運動は既に那邊に去りたるか」(兄)「偖は妹よ未だ左の詩を知らざるか」

「魚の住家は　水の中
うきつしづみつ　うつくしく
力いだして　泳ぐなり

眞直におよぎ　　　折れ曲り
心々のおよぎかた　　なれたるさまの
たのしさよ、」

直と曲と此辨別は我愛する小兒の生涯に實に緊要なるものなり、彼人は直くなる人なり、彼の所行は直ぐなる所行なり彼れの性格は直ぐなる性格なり、彼れは直ぐなる道を踏めり、彼は直なる思想を有し直ぐなる言を吐くと、此等の事は兒童と雖ども之を聞くに喜ぶなり。然れども彼は曲りたる道を踏む、予は曲りたる事を好まず、此の如く曲なる言辭は如何に人に不快を與るか。さらば幼稚の時より早く曲直の別を明瞭ならしむるは兒童に取て最も緊要なる事と謂ふ可し。畫工の畫くや又曲直の觀念あり、小兒の游ぐ溪水の流、草木の生長、蛇の匍匐、皆曲直あらざるなし。若し兒童をして夙とに曲直の辨別を明確にし併せて曲即ち不正直は不幸を來たし直即ち正直は幸福を生むの母たるを悟らしめば小兒の心自ら正直に、其一擧一動皆正直となるに至らん。是に於てか其生涯や小魚の水中に游泳して自由自在なる

が如く樂き生涯となるべきなり、

●的……縱横　（第三十三十一ページ）

此遊戯は是迄の遊戯に比すれば特に斬新にして小兒發達の順序中最も重要の部分を占むるものとす、何となれば何れの地方に於ても此遊戯の骨子を見出さゞるなく、此遊戯は實に兒童を誘引して知識と實業の生涯に導き入るものなればなり、今小兒をして母の前に立つか或は坐せしめ、其右手又は左手を地平線と平行に前に伸張さしめ、小兒の食指か又は母の食指を以て小兒の掌中に十字線を畫き其二線相交叉する點に高指を以て錐もみする形容をなし尙ほ同指を槌として釘を打ち込むが如き樣をなさしめ、かくて歌を唱ひて母の手掌を平たく其上に置くべし。題詞を一見せば既に此遊戯の意味を了るを得ん、然れども今其一二の點を更に明白に說明すべし、既に言ひし如く何故に此の遊戯は種々の形狀を以て各國各地に

普通に行はるゝか、蓋は吾人は此遊戯に於て位置(物の所在)と形狀(物の形)とに關する最始の觀念を發見するを得べく、而して此觀念は實に事物の觀察上に缺ぐ可らざる秘訣なればなり、縱橫の二線相交叉して一線は垂直に一線は地平に其位置を占むるが如く、而して其相交叉する所に四個の角度成る、其角度皆相同じきを以て亦皆直角なり、斯くて此二線は其角の四端と共に同一平面の上に在るは既に手掌にて示したるが如し。母或は云はん予と雖も斯る六ケ敷言辭は了解すること能はず爭で我兒にして之を解せんやと、然り實に然り、かくの如く小兒に語るも小兒は未だ其言辭を解し得ず、然れども既に事物に關する預覺を有し居るなり、否らずんは爭で此遊戯を好まんや。されば母たるものは事物の知識は言辭の知識よりも更に近く小兒の心に存し、深く小兒の心に潛み、早くも自然に小兒の心に發生するものなるを知る可きなり。故に實物を以て小兒を教育するは言語を以てするに優る幾層倍なるを知らず、さらば自然法に則りて最も有効なる教育を實施せんには須らく此に注目して間接に書籍若しくは言語を用ゆるに代へ實物と行爲とを以て

直接に天稟を開發せざる可らず、此教育法の其成果の恒久なる所以は實に親しく目撃せしものは一層強く明白なる印象を人の心に刻するものなるを以てなり、小兒は既に特種なること、普通なること、及び両者と自己との關係此三者の常に相連結せるを感知せしものゝ如し

何物か　まだ稚兒は　知らねども　二の棒と板一つ　合せし的は　こゝにあり　後には小兒の　注意より　はなれぬ的を　ながめつゝ　心の中に　かくれたる　つよき思想を　呼出しぬ

二つの棒と板一つ　一つの的となりにけり　こどももそれを　見習ひて　その目の前に　三つのもの　つなぎ合せて　末終に　數も形も大きさも　同じ的をぞ作りける

此圖を畫きしものは小兒に此意を說明せんと意を致せしものゝ如し三人の射手は全一の的鵠を目指し、的を持ち行く三兒も亦同一の願望を以て滿され居るなり、

●菓子採（第三十二、三ページ）

此遊戯は普通に行はるゝ遊戯にて英國及び他の國々にては其種類夥多あり、而して其廣く各國に行はるゝを見れば以て何處にても母たる者は其本能自然の性により百方小兒自然の要求なる肢體の運動を遂げしめんことを勉め且つ其爲す所をして人生の實際に關係あるものたらしめんと期する事を徴見するに餘あり。加之是より推して考ふるときは從來小兒の教育に關し母及一般の人々が本能性に基て唯偶爾に支離の形を以て行ひ來りしものを取て反省思察の光に照して之を精化し以て確乎たる理由の上に立ち全體に論理的の關係を有する完全なる教育法となすの必要あるを悟るべきなり、

小兒は前章の如く母の前に立ち或は坐し、母は其小さき両手を把り其両掌を合せて拍手せしむ、斯くして此遊戯始まり以て全腕を運動習錬することを得るなり。元來此遊戯たる小兒の其腕を用ふるの必要を感じ活動を好むの嗜好あるより起りしものなれども其結果や遂に知らず識らず生活上の關係に彼を導き至らしめざ

るを得ざるなり。試に思へ小兒が慈母の手より「パン」又は其好む菓子を得て之を食せんには先づ「パン」燒人の之を燒くあらざる可ず、さらば「パン」燒人は母の愛と小兒の嗜好とを連續する媒介にして生命聯絡の鏈環なり。然れども是れ唯一無二の鏈環に非ず又固とより其最後の鏈環に非ず。若し能く機會を把捉して巧みに此遊戲を利用せば此生命聯絡の脈をたどりて遂に最後の鏈環に達し萬物に於ける天父の恩惠を小兒の心に明確ならしむるを得るなり。何となれば磨者粉を磨かざれば麵麭燒人其「パン」を燒くを得ず、農夫穀物を收穫せざれば磨者其粉を磨くを得ず、地穀物を產せざれば農夫穀物を收穫するを得ず、天然相和合して其生々の化を遂ぐるに非れば地穀物を產するを得ず、神勢力と物質とを備へ一定の經綸以て之を統るに非れば天然相和合して其生々の化を遂ぐること能はざればなり、

麵麭を燒き以て之を食ふの遊戲を爲す所の小兒は既に此等の觀念を以て生長し來りしや明なり。專心一意に戲るゝ小兒の遊びを妨ぐる勿れ。もし小兒の意中に存する精神に同情同感となる能はずば寧ろ放任して之れに干涉せざることこそよけれ

此遊戯や決して純白聖潔なるものを誘ふて卑陋なる外部的の生活に墮落せしむるものに非ず。反て此外部的遊戯に由りて更に之に心靈的の意味を附し之を聖別して高尚ならしむるものなり、若し其無邪氣なる遊戯に自由を與ふるなくば今も後も生涯如何にして輕快にして無邪氣なる中に其神聖なる品格を涵養することを得んや。然れども此の如きは唯親愛なる母の目と懇切なる母の口に由りて小兒の生命の至聖所より發したる無邪氣を善導するに由てのみ完成するを得可きなり、

●鳥の巣　（第三十四、五ページ）

母先づ獨り其手の形容を示し次に其形容を反覆して、兒をして之を模せしむるの方法は圖解に於て明かなれば唯一言を加へて止むべし、

今此遊戯を始むるに當り両掌を合せて之を鳥巣に摸し両拇指の指頭を掌中に沒

して唯下方の關節のみ見る可らしめ以て巢中に在る二個の卵に擬し而して「二羽の雛よ仝時に孵化せよ」との呼聲に應じて其拇指の頭を擡げて二雛の頭の如く見せ斯くて「ピーピーピー雌鳥の呼ぶを聞け」と云ひつゝ宛も雛が親鳥を尋ぬる如く其両拇指を動かすべし母たる者は善く心して小兒の生命と其發達とを熟思し漸次步一步と之を踪跡すべし、さらばたとひ一時に宇宙生命の聯結てふ深く且高尚なる覺念を小兒の心に喚醒し能はざるも、特に無限なる唯一の生命の源泉即ち至善なる獨一上帝の覺念に至ては之を喚起する更に容易ならずとするも小兒は既に深く且つ確かに其心の深底に是等の覺念を喚起す可き稟性を備るを感知すべし。而して此等の稟性を喚醒するには極めて徐々に之を爲すべし唯弱き步みと優さしき手とを以て步々着々之を導かざる可らず。而して之を爲すの道他に非ず能く天然の眞相を看破し人間の生涯を熟思し其智慧及想像の生命中に發顯せしと仝一なる生命を兒童の心中に増蓄するに在るなり、

母たるものは先づ此遊戲に於て此等着步の初階に入るを得。母は今や其兒童が天

然の內界的聯結を其心裡に感ぜし事を覺知するに由て此着步に入らんとしつゝあるなり。小兒は何物に於て最も具體的に最も圓滿に此聯結を活如として認むるを得るか、之を明示するもの豈に幼き鳥の巢に勝る物あらんや。試みに見よ春夏萬物發生の候に至れば凡て其發育上缺ぐ可らざる需要物を齎らして其雛の生育を助け秋冬肅殺の氣來り侵すときには既に羽毛以て寒氣を防ぎ兩翼以て自由に飛び自ら其餌を求むるを得可らしむ。其巢を構ふる位地を擇ぶに於ても親鳥は能く其食物夥多ある所に就きて其巢を造り以て其雛をして飢うることなからしむ。人家の周圍は蚊蠅蜘蛛其他昆虫稍多し是を以て檐下には燕雀巢くゐ生垣には百舌鳥、白眼鳥巢ふ、蟲多き朽木の空洞には白頭翁巢くゐ蛙の群集する沼澤の邊には扶老鳥の巢あり、

巢の形狀に至ても亦其營造の時と場所とに隨つて其構造を異にせり、林檎の枝にかゝる鷽の巢は其色灰色にして林檎の樹皮と殆んど識別し難く白頭翁の巢は菌苔の把束の如くにして容易に菌苔と區別し難し、共に外敵の襲來を避くるの便あ

り。特に造化の安排を見る可きは小兒若し羽毛未だ生ぜず全體極めて薄弱なる雛兒を見るときは忽ち深く愛憐の全情を起し之を愛護せんと欲するの情念を發起するの事に在り、

小兒は其母に向て「母よ彼の兒等の見出せる巣に雛兒の澤山居るを見よ、親鳥は巣を離れて遠く外に去りたれば雛兒は定めて無聊を感ぜしならん、兒等の來て雛兒を訪ひしは誠に善し、余は此雛兒を憐れむ」なりと母は敎へて「ソハ汝過れり、親鳥は唯其雛兒の餌食なる穀粒若しくは小虫を求めんため暫らく去りしのみ、幾くもなく直ちに歸り來るべし。目を擧げて見よ、父鳥は巣邊の樹梢に在りて謹愼なる番兵の如く其雛兒の小兒に傷けられんことを恐れて脇目もふらず凝視し居るを。而して母鳥は今餌食を得て快活に飛び歸るなり。母鳥が飛去て餌食を尋ね父鳥が張番するときも太陽は常に其巣を温めて母鳥の如く其雛兒を愛育するなり。見よ此雛兒の如何に幸福なるかを今其雛を遺して飛去れる母鳥は暫しも其子の事を忘れず、飛び去るときも歌ふて曰く

「愛らしき　我子やしなふ　其ために　飛びくる蚊をぞ待ち兼ぬる　いてや獲物が手に入らば　家路をさして　よろこびの　あゆみをいそぎ　はこばせん歸る我身を見しときの　子の喜や　如何ならん」

去れば我兒よ余も亦歌はなん

「をさなごよ　しづかに遊べ　ひとりして、余の時々　汝がそばを　はなれて仕事に　出づるのも　皆汝がための　故ぞかし、獨り遊ぶと　嘆くなよ、天津日影は　いつとても　照らして我子に　添ふものを、神は子供のなく顏をきらひ給ふを　よく知れよ、如何にちひさき手足をも　おもひのまゝに　動かして　遊ぶ力をもてるこそ　深き御神の惠なれ　其手と足を　よく用ひたのしく遊ばゞ　末終に　つよき身體と　なりぬべし」慈愛の母よ　オー母、よ　汝が恩愛は　わだつみの　千尋の底より　猶深く　青空よりも　猶廣しさればこの恩　世の中に　くらぶるものは　なかりけり

●花籠　（第三十六、七ページ）

手の位置は圖に示したるが如く右手の小指を左手の食指の上に置き右手の指頭を左手の拇指と食指との間に挿入し両掌を以て空虚なる半圓形を作るべし、然るときは双手の拇指は外側にて相合ひ此に花籠の形狀成るべし。左右の手の位置を前と反對にするも可なり、然れども両拇指は常に外側に在りて其形狀亦前と仝じくすべし、而して此遊戲の目的は主として指の屈曲を習練するに在るなり、此遊戲の裡面に含蓄する意味は亦前章の如く見る可き物を以て見る可らざる心靈的の關係、特に小兒と家族との關係を敎へ小兒の心を導きて相愛の情を喚起するに在り、

兒等は何故に斯く注意と懸念とを以て其奇麗なる籠に彼の愛らしき花を集むるや。其母は亦何故に手に鋏を持ちて彼の美麗なる百合花を剪り採るや。思ふに今日は是れ彼等の親愛なる父の誕生日なり、見よ其父は丘上紅紫爛熳たる園亭に坐して手に鉛筆を執り小兒の爲めに小畫を描きつゝあるを、蓋し彼は其誕生日を以て

亦その愛兒等の快樂の日と爲さんと欲するなり、想ふに今彼の描く所は靜肅なる朝景色にて特に朝暾の將に海を出でゝ昇らんとするの美景に寄せて愛兒等今日有望の樣を壽ぶきしものならん。又見よ幼妹は既に之を預知せしものゝ如く大なる花籠の滿つるを待ち兼ね、其小さき花籠を携へて園亭に居る父の許に急げり。斯くて父に曰けらく「愛する父上よ、あなたの誕生日を祝せん爲め少量の花を持ち來れり希くは之を受け玉はれ、暫らくせば母上、阿姉阿兄は更に澤山の美花を齎らし來らるべし」と父は喜んで「愛子よ、汝の花は實に美麗に、新鮮に、又淸潔なり、今日は萬物一として我が心を喜ばしめざるなし」と曰へり。蓋し彼は日は燦然として輝き、空は晴れ渡りて秀明に、氣候は溫和に、樹木は翠を滴らし、小鳥は樂しげに飛舞し、其囀聲は特に甘快に、而して園廷は花と露とにて更に一層の光彩を加へしを悦ぶなり。更に見よ彼の前面に聳えて燦として日光に反映する古城は宛かも彼の爲めに萬歲を唱ふるの風情あるに非ずや是れ今日萬物悉く彼れに快適なる所以なり。父は更に彼女に曰へらく「然れども若し我に愛する少女なく、少女に親しき兄弟、姉妹な

くば此等の物ありと雖ども左まで予に愉快ならざるべし」と、少女(此書を視居る少女)は忽ち叫んで曰く「アーそして親切に善良なる母も」と、父も亦此言辭を發せしや疑なし、父はたしかに母が彼と都ての兒女を愛するを知りしなり。父又た少女に向て曰く「少女よ、總て此等の歡喜に就き余は誰に向て感謝するか汝は之を知るや」と少女は窃に其心に以爲らく是れ父自らを云ふものならん、何となれば父は實に斯く善良なればなりと。然るに父は曰く「我と我儕凡ての者に生命を賦與し玉ひたる萬物の父、萬性の根原たる神、是れ即ち我儕今日の歡喜に就き感謝せざる可らざる方なり今にも汝の母姉妹兄弟が來らば共に跪て此恩惠に感謝せん」と

感謝せんとて　囀る鳥　翼をならして　天とぶ雲雀　賞美を得んとて　舞ひ行く燕　神の榮えを示さんと　笑みつゝひらく　園の花　朝日の影に　廣がりて　露にかゞやく　野邊の草。あゝいま祝詞と　讚美をもて　天なる父に感謝せり　萬物の父に感謝せり、

父小女に向て曰く「今我儕も此花鳥の如く天の父に感謝せん」

母と共に此書を見居る小女忽ち呼んで曰く「母上よ、父上の誕生日は何日なるや」父は花をぞ愛で給ふ　されば花を奉らん　父は花を見て喜び　花は父愛を我に示す

●鳩の家

(第三十八、九ページ)

手腕及び指の運動

此圖中の武骨なる男子の手は明白に鴿の家を構造するの方法を示せり左腕は稍々垂直ならしめて杙即ち柱と爲し組合はしたる兩手は圓形よりも寧ろ矩形にて柱の上の鴿の家を表はし、右手の食指は自由に動きて開閉せらるゝ鴿の家の戸に摸し且つ種々に動くに由りて又鴿にも擬せらるゝなり。兩腕の發達を均一ならしめん爲め左右相替へて右腕を以て其柱と爲し左手の指を以て戸及び鴿に擬するも亦可ならん。年長の小兒は此遊戯を見て自ら其眞似を爲すことを大なる快事と爲す

なり、何となれば小兒は既に幼稚のときより活潑なる生命特に天然の生命を觀察することを好み又自由に戸外に運動し其生命を强壯にし之を發達せしめん爲め清新なる空氣を呼吸することを願へばなり、故に小兒の撫育者たる母は能く注意して出來うる丈け多く清新なる空氣を小兒に與へざる可らず。然れども啻に此にのみ止る可らず、たとひ小兒今は尙ほ無意識の境にありと雖ども其精神は常に一時現はれて乍ち過ぎ去るものゝ中に永久に連續する存在を求め外界に就て內界の深意を求め、個々別々の中に深く潛伏する普遍を求め厖雜異樣の中に統一を求め、竟に知らず識らず獨一の神の一閃光なる人の兒として自己の中に統一及和合即ち神を求むるなり。是故にたとひ其未だ感知し得可き感情として現はれ居らざるも能く力を盡して此天性を發育し、之をして次第に活潑に且濶大に竟に小兒の心中に活動する一個の覺念とならしめざる可らず。母又は母に代はりて養育の任に當るものは決して此兒は尙ほ餘り幼稚なりと謂ふ可らず、尙ほ餘り幼稚なりとは何ぞや、然らば卿は卿の兒童の心靈的開發は何處に何時、如何にして始まるかを

確知するか、未だ嘗て存在せざる心靈的開發の由て端を開く限界が何處に、何時如何にしてあり得るかを卿確知するや、心靈的開發の起發點として未だ嘗て劃然たる限界の存せざるに其限界を知れりと謂はゞ實に奇に非らずや、其發達は永久間斷なく其間は決して劃然たる限度をなすものに非るなり、母よ常に此眞理を心に留めて忘れざれ、語に曰はずや「常に心に思ふ事は又其行に顯はる」と、悲哉教育に關する疑問は往々何時より始むべきかといふ點に存せずして如何なる方法により如何にして實行すべきかといふ點にのみ存することあり。小兒は其歩行に先ち其一歩を運ぶの方を學ばざる可らず、其一歩を運ぶに先ち其立たんことを試みざる可らず、其立たんことを試むるに先ち其全體を開發し其脚を強壯にせざる可らず、若し唯其脚ありと云ふのみを以て直ちに強て小兒をして直立歩行せしめんとせば、反て其脚をして軟弱屈曲せしむるの恐あるべし。身體發育の順序は亦心靈發育の法則なり、若し時期に後れて其兒を教育せば身心共に拙粗醜陋に陷るを免れざる可く、又若し早きに失するも亦然り、嗚呼哀哉吾人は嘗て軟弱にして

且つ屈曲せる脚を持てる兒童の如く教育早きに失せし爲め軟弱にして且つ屈曲せる心意を以て其生涯を送りし多數の人に會せざりしか。母及び母に代て養育の任に當るものは須らく生命の大聯結と其單純なる法則に準據して其少女を教育す可し、之れを忘れざらん爲め常に左の語を記するを要す曰く

「生命の局部は相連結して唯一の全體を成さゞる可らず小兒の生の目的は幸福なる統一に達するに在り」

吾人は鴿の家と其表はせる單純なる生命の法則とを忘る可らず、此法則は亦腕に嬰兒を抱持せる母の心と圖に示されたる凡ての者の心とに現はれ出てゝ躍如たり。母の腕に安らかに憑り居る健かなる嬰兒は其母の足下に在て物を啄みつゝある三羽の鴿を凝視して眼瞬もせず恰かも目を以て彼等を捕獲せんと欲するものに似たり、又一人の童男は恰かも遊戯に繋縛されしもの丶如く身動きもせず母の前に立てり、彼は今、切斷されし枝の彼方に栖り其巢及雛の所在を知られんことを恐れ故意に其雛の在る洞孔より其頭を反け居る山雀に心を奪れ

て惚をぬかし、緊かと其手に握れる林檎さへ忘れ居れり、彼兒は鳥を驚かせじと低聲に「暫らく御待ち、母上よ、彼の枝の切口に在る洞孔を御覽」と云へり母は直ちに其意を察し行歩を止めてかの頻りに四圍に氣遣ひ居る小鳥を見たり。時に他の二人の小兒は我家を指して戻りつゝありしが何か彼等に取て大切なる事を語らひ合ひ交情頗る濃かなるが如くに見えたり、

小兒の右の方に在りし母は問へり「愛子よ汝は何處に在りしぞ」と、小兒は「庭や園や野や牧場や池や小川に」と答ふ

「我愛子は如何に美しき物を見しや」

「鳩と雛、鵝鳥と鶩、燕と雀、雲雀と鶯、鶺鴒と山雀、鴉と鵲、甲虫と土蜂、蚜虫と蝴蝶」

「鳩と雛とは何處にて見しや」

「庭にて見たり、母上よ彼等は皆庭に落ちたる穀粒を拾ふて之を食せり、雛は食ふ可きものを見出すときは疾走りて之に赴き、雌鶏は雛兒に與ふ可きものを得れば連

りに雛を呼ぶ鴉と鳩とは雛の如く疾く走る能はず、鴉の走るは鳩の如く、里鳩の走るは鴉に似たり、併し鴉と鵲と鶺鴒と山雀とは皆善く跳れり、其硬き脛を以て跳るを見るは頗る興味あり、母上よ私と共に往て之を見玉はぬか、鵝と鶩とは能く水上を泳ぎ又能く水中を潜る、然れども亦能く飛舞を善くす、嘗て私の頭上を超えて池中に飛込み大に私を驚かせしことあり」と兒の語るを聞き母は「知れ愛子よ其鵝と鶩は亦鳩、雞、雛、燕、雀、雲雀、鷽の如く鳥類なり、彼等は皆鳥類なり」(小兒)「母上よ鳩も牝雞も亦鳥なるか」(母)「他の鳥の如く亦羽毛と両翼と二本の脛を有するに非ずや」(小兒)「併し鳩は鳩の家に栖み牝雞は飛ぶこと能はず」(母)「少しは飛び得るなり畢竟牝雞の飛ぶ能はざるは其習練不足にして直ちに忘るゝに由るなり、我儕の忘る可らざるは習練を爲すことなり、雀と燕は鳥なれども亦家若しくは檐下に巣を作るなり」(小兒)されば母よ蜂蝶及び蚋も亦鳥なるか、彼等は両翼を有ち鶩や牝鶏よりも高く飛ぶに非らずや」(母)「汝は見ざるか、彼等は羽毛を有せず、鳥巣を作る能はず、其他鳥の當然有すべき種々の物を有せざるを、彼等は其思ふが儘に動く故に鳥や其他受造物と

均しく動物なり、然れども鳥に非らず、彼等は又鳥の有せざる種々の物を有せり、此蚋又は蠅を見よ、其體軀に所々刻目あるなり、故に此類の動物を關節動物と云ふなり」（小兒）「母上よ今より一緒に野外に行き玉はざるや、總ての物皆美麗なり」（母）「予は汝の衣服を縫ひ、汝の食物を調へ、其他萬事秩序よく整理せざる可らず、故に共に行くこと能はざるなり、見よ彼の自由なる天然界を、萬物皆所を得て秩序整然、各皆うるはしく樂しく其働きを成し遂げて居るに非ずや、之を眺むるときには宛かも萬物を斯くもうるはしく造り玉ひし神が『妻たるものよ、母たるものよ、汝の家に於ても萬事秩序正しく各物其所を得、各人皆其職分を盡さねばならぬぞ』と云ひ玉ふを聞くの心地ぞせらるゝなり。又眼を轉じて他の事物を見るときは、亦『人各其所に安して正業を勵まざる可らず、今や小兒は其強壯を養はん爲めに小鳥の如く遊びまわるを得れども其成長の後は林檎の樹の如く一定の場所に在りて善果を結ばざる可らず』と云ひ玉ふ樣に思はるゝなり、かゝる譯故母は汝と共に遊に行く能はざるなり、たとひ母は樹木の如く家に留らざる可らざるも汝は往て萬物を觀察し、歸り

來て其話を母に告げよ」(小兒)「母よ私は明日再び行き、其時見し事を復た話すべし、希くば其節神がそれに就て語り玉ふ事を余に語り聞かせよ」

結論　教授と學習は人間の生涯を通じて止まざるものなり、白髮の教師も尚ほ學ぶ可き事多く老練なる教育家も尚ほ教へを受けざる可らず、啻に人より學ばざる可らざるのみならず、我儕を圍繞せる凡ての物より學ばざる可らず、動物よりも學ばざる可らず、我儕の鳩に於ける亦然り、余幼時嘗て鳩を飼へる人の家を訪へることあり其時我居れる室は恰も鳩の巢に隣れり、時に多くの鳩が各自の家を指して歸る途次鳥語にて語り合ふを、しば〱聞けり因て此に鳩の短歌を得たり、

「鳩室に　歸りし鳩　諸共に　空の旅路の　不思議をば　打語ひつ樂めり　汝も其聲を聞きつらん　クークークー」

小さき鳩が其巢を出で愉快に空に飛び行く樣を告げらるゝは小兒の大に樂く思ふ所なり、

母たるもの、若し兒童に實話を語り聞かするに其適當なる時を以てせば其話は實

に小兒が其心中に深く潛伏する自己の內性を寫し見る究竟の鏡となるべきなり

●此小さき拇指　（第四十、四十一ページ）

指を數ふることゝ此遊戲に於ける手の位置とは多言を要せずして明かなり。且つ其手の位置は詳細に圖中に示されたれば茲には唯其意味に就き數言するを以て足れりとすべし、

小兒の天性に基き家庭又は幼稚園にてしば〳〵見る所の「是は拇指」てふ言葉を以て始むる所の計數遊戲は或は漠として意味なきが如くなるも又他の一方より之を觀來るときは小兒をして悉く知らしむるは好ましからずと思はるゝばかり多くの事柄を含むものゝ如く見ゆ。蓋し凡て計數の意味を含む遊戲は種々の點に於て小兒に必要なるものにて是等の遊戲を交互反覆することに由て題詞の說明する如く更に一層明白なる理會を得べきなり。此短き遊戲の歌はよく其指を示して

食指、中指、環指、小指なる名の由來を説明せり、(獨り拇指の説明なきは其母を代表するものなること人の皆よく知る所なればなり)。抑此遊戯の効能は第一小兒に比較力を働かしめ、第二に名は必ず實に伴ふことを知らしめ、第三其極めて幼少なる時より夙に已れに密接の關係を有するものに注意せしめ以て空漠たることを避けて注意深き思考力を發達せしむる等是なり、

女子を畫て左手を代表し男子を以て右手を代表せしめし所に畫工の考案自ら表はれたり。蓋し左手は卽ち心臟に最も近くして女子の心情を表はし、右手は卽ち强健にして男子の意志を示せばなり。加之若し正當に之を觀察し善く之を了解するときは畫工は更に、家族又は他の社交に於ては幾分か外面の差異あるに拘らず其内部に於ては高尙なる一致と平和なる共働との必ず存するを示さんとの深き意匠を凝らせしものなるを知り得べし。而して歌は既に此意を歌ひ畫も亦此意を表はせり、

母は其娘を左腕に抱きて今何事をか爲しつゝあり、彼れは彼女が成長の後善く事

を爲し得る樣に指の名と其用法とを敎へつゝあるなり。其下方に在る二少女は注意、勤勉以て縫針と「ピンドメ」とを試み。彼方の二小女は花園に在て花草の培養を勉むるなり。一童男は今や其友に贈らんとて勇しく李樹に攀ぢて其實をちぎりつゝあるなり、

「母上よ、私をも樹に攀ぢ上らしめよ」「今少し體力の强壯になりしとき」

●拇指曲れ　（第四十二〔三〕ページ）

此遊戲の方法は明かに二つの手の畵と歌とにて示され其意味は既に題詞に由て明かなれば亦殆んど言ふべき餘地を見ず、

小兒をして四肢を不適當に用ゐしむるときは其嗜慾の念を激發し、優雅の感情を害し心情の純潔を汚し、更に一層の憂慮を增すものなり。嗚呼此事たる單に小兒の動作と其心身の情形とを皮相的に考察するも既に其空言に非ずして確乎たる事

實なることを見得て餘あり。然らば今日廣く世間に流布し多く小兒の高尙なる性質を毒する此害物を預め防ぐの術あるや。若し得可くんば之を全く驅除し得るの法ありや。曰く唯一策あり即ち小兒の身體と心靈と、感情と思想とを適當に運用し斷えず之を活動せしむる事是れなり。就中其四肢を習練して之を發達せしめ、勉めて之を運用することは能く嗜慾の激發を制し、又思慮なき妄念を去るを得べく。斯くて後更に高尙なる內界の考察に入るの路開く可きなり。即ち今茲に其端を開く所の此等の四肢五管の遊戯は實に小兒を導て此適當なる活動と習練とに進ましむる所以のものなり。

●樂しき家族　（第四十四、五ページ）

善良なる母、親しき祖母

世若し精確なる理會と、最も思慮深き考察と注意厚き教養とを要するものありと

せば人間家庭の生活と、天然界に於て之に類似するものこそ即ち是れならめ、ア、家庭の生活なるかな、家庭の生活は三個の著しき觀察點よりして其甚だ重要なるを見るなり。斯る重要なるものゝ性質と需要とを今此狹き紙面に縮寫せんと欲するは實に難きことならずや。家族は人類の祝福なり、神が人を教養し玉ふ方法中最も神聖なるものなり。家族よ家族よ我儕をして明白に率直に公言せしめば、爾は學校若しくは教會に勝りて重要なり、故に正善恰當なるものを保護するに缺く可らざる凡ての者よりも更に重要なること勿論なり。試みに思へ若し家族にして謹愼節制、思慮、考察の精神を涵養し之を學校に齎らさゞりしならば如何。知るべし其教育法如何に完備するも畢竟中空なる卵殼の如く空の空に過ぎざるを其外形如何に善美なるも豈此中より新しき自由なる生命の孵化する理あらんや。若し家族にして其心情と精神と、觀念と思想と行爲と生命とあらゆる全靈全身を擧げて之を活ける獨一眞神の祭壇に致し之を神聖にするに非らずんば教會ありと雖ども將た何にかあらん、又正義と眞理の保障なる國法は如何、家族か神聖として之を崇む

るに非れば亦汚瀆を免れざるなり。是故に母たるものは其兒の尙ほ幼稚なるに及んで早く既に其簡單なる手指の遊戲に由りて全體一致なる性質就中家族の一體一致なる事を豫想し得る樣に敎へざる可らず。斯くの如くして母は始めて一致ある生命としての小兒の生涯に最も確實なる基礎を與へたるものと謂ふ可きなり。完全一致の存する所、此に必ず生命あり、少くとも生命の萌芽あるなり。支離滅裂の存する所にはたとひ其分裂にして微なりとするも必ず此に死あるなり、縱し否らずとするも亦必ず死の萌芽あるなり、

祖父母及父母と子孫の關係は實に詳明なるものにして特に家族に於て之を考察するの價値あるなり。小兒は宛も鏡に對して見るが如く、父母の祖父母に於ける關係中に自己が其父母に對するの關係を見るなり、何となれば小兒の其兩親に於ける關係と等しき關係を兩親も亦其祖父母に負ふことを見ればなり。而して父母は亦祖父母と自己との關係の如くに自己と其兒との關係を見るなり。此に五なる數にて表はされたる此複雜なる二重の關係は實に小兒の生命と其發達とに重要な

り。此圖を畫きし畫師は既に此重要を知て常に之を其眼中に存し、しば〳〵五なる部分の中に全體一致の生命あることを寫さんとせり。此圖中の花に於ても亦畫師の此意匠あらはれたり、蓋し凡ての有核果樹及び同族の植物の大概五の花瓣を有する事實より推考すれば此種の果物の特異なる滋味は數五なる法則中に存するに非ざるかとの思想は實に一顧の價値なきに非ず、安んぞ知らん此思想畫師の心に動き以て此圖を作りしに非ざるを、

●小さき拇指一つ　（第四十六、七ページ）

圖に示すが如く指爪を少しくあげて拇指を自然のまゝに食指の傍に置き、逐次他の各指の名を呼んで之を數へ既に數へし指は之を曲げて掌中に伏さしめ、其各指の屈節は敢て拇指の指尖より超えて先きに進ましめざるの度に居らしむべし。斯くて其拳は美麗なる全體一致を表はし、兒童は歌を聞て其指を小兒と思ひ、指尖を

其顔面と想ふなり。畫師は實に此意匠を以て此手を描けり、否な寧ろ此手にて代表せられたる眠れる小兒を描きしなり、

休息と睡眠は此畫全幅の趣向にして其罌粟の花も梢上の五鳥と共に眠れり、然れども其生命は尚ほ熟睡の裡に潜みあるなり。而して此の如く重要なる意味は亦數と數を計算ふることの中に深く潜みて存するなり、試みに思へ詩にして文字の數と韻脚の節度とを顧みずして詩たるを得可きや、調節と計數とは是れ作詩に缺ぐ可らざる要素に非らずや。又見よ全く數に關せず、時の正しき計算もなくして能く巧妙なる音樂や莊嚴なる神樂を奏し得可きや。一日一時の誤用は如何に人の全生涯を害するか、如何に些細なりとも一旦失ひし時日は決して再び之を回復すること能はざるなり、必らずや爲めに多少の犠牲を爲してたゞに其幾分を回復するを得るのみ。兒童亦既に之を自覺するものに似たり、何となれば兒童の漸く生長するに從ひ其遊戯中に物數を計算することを好むは何人も能く知る所なればなり、是故に我儕は兒童の幼時に於て既に計數を好むの傾向あるを利導し、時の重要なる

ことを十分に知らしめざる可らざるなり、

●指「ピヤノ」　（第四十八、九ページ）

保姆又は母卿自身若くは其愛子の左手の指を「ピヤノ」の原譜の如く其指節の殆んど直角を爲すばかりに地平に屈げ、而して指に少許の力を入る可し。斯くて右手の指を以て「ピヤノ」を奏するとき原譜を壓すが如く例の左手の指頭を壓す可し。

既に前章の遊戯に於てあらはしたるもの即ち唱歌に於ける計數の必要を兒童の心に感銘せしむる事は此遊戯に於ても亦重要なり。蓋し音樂に必要なる事は其樂器の震動が一定の時間に一定の定數あるべき事にして、時と運動の計數、之れ實に唱歌に於て等閑に附す可らざるものなり。運動の法則並に其整齊の智識の如何に人生に重要なるかは既に人の熟知する所なり。凡ての點に於て能く運動の整齊を了解する人は世之を稱して精緻なる調音者と云ふ。兒童の幼時に於て時に就ての

正確にして且つ精微なる觀念を開發し、將來秀逸なる調音者たるを得せしむるの教養を欲ぐときは卿の心果して安きを得るか。幼少の時より夙に唱歌の力を開發せよ、さらば之れに由りて兒童の心裡に高貴なる貨寶を發掘して之を供給するを得可きなり。獨逸國の教育家は獨逸人が特に以太利人に比して其聽官の習練を等閑に附するを非難し、更に痛く其歌唱の機關を開發せざる事を詰責せり。然れども更に重要なる事はよく内部の調音と唱歌とを習練し心に均齊和諧の觀念を造くり外耳未だ何をも聞かざる時に心耳は既に合調の和音を聽き、肉眼唯混雜をのみ見る所に心眼は既に此に其均齊を見るに至らしむるに在り。小兒未だ幼稚なるに當り早くも其心に内外調和の萌芽を植ゆるは何物か之れより重要なるあらんや。蓋し人生は限りあり、此の短き生涯に於て其多端なる方面に向つて悉く我能を開發せしめんと欲するは到底能くする所に非るなり。然ども我に他人の開發せしものを曉得するの能力ありてよく他人の長所を咀嚼し、又之れを嘆美するを得ば幾分か我多端の方面に發達せしの意味あるなり。人誰か其一代に於て凡ての異なり

たる天稟を顯はし得るものあらんや、唯各人各自の天稟を開發し「我は彼れの天稟の中に我自己を品し彼亦我天稟の中に彼自身を認め互に相嘆美し相資益して始めてよく相調和したる一の全體として」凡ての各異の天稟を顯章するを得べきなり、神の影像をして圓滿ならしめんには互に相愛する全世界の人類を要すると知るべし、

今此愛らしき小畫に付き一言を加へんか思ふに慧敏なる母は此畫中に見ゆる凡ての美妙を其愛兒に聞かしむるを喜ぶならん全幅の圖畫皆是れ音樂ならざるなきなり。見よ畫中何物か和諧の好音を發せざるものかある、穀物の穗と其莖とは調を合せて低聲に唱ひ、其中に巣籠りする雲雀は其好音に傾聽し、忽布の芳香は更に蜜蜂に甘快なれば蜜蜂は之が爲めに其翅を鼓して感謝の樂を奏せり、青葉の梢に在る艷麗なる五彩の鳥は細微なる一音波をも聞洩らさじと悉々たる泉流の上に栖み、籠中の金翅雀は時々其翼を鼓して高調に歌ひ恰かも「最も小さき物の中にも造物主の大能を認めよ」と告ぐるに似たり、又二人の姉妹の靜かに奏する音曲の調

の面白さよ、彼等は共に唱ふ其歌聲のよく和調せるに殆んど其心を奪れたり、此一致和合の調べこそ我所謂音樂なれ、畵工は最も精緻に此畵を描けり。小兒の上方に在る二羽の鳥は容易く之を聞き得んが爲め成る可く近く棲りしに、小兒の頭上に在る老音樂師は自ら禁ずる能はずして美妙の法則を其翼の鼓動に由てあらはしつゝ低調にて好音を弄せり、傍に在りし金甲虫は之を聞かん爲め今や咀みつゝありし青葉を棄てゝ音樂師に近づき來れり。於是色は曰へらく「我儕も又我儕をあらはすなり」と實に音聲に傾聽するもの一として輝ける色を有たざるなきなり、穀物の穗と葉とは金色を帶び青空の樂師なる雲雀は土色なり、これ畦畔の色に紛れて容易に人に捕へられざらんが爲めなり、野の忽布は青くして蜜蜂は鳶色なり、愛らしき小兒の頰は薔薇色にして、微笑する童兒の髮は鳶色に、而して小女の髮は亞麻色なり。地上凡ての物は皆青空に圍繞せらる是に於て樹葉は青空より其青色を吸收し之を黃色なる太陽の光線に調合し以て希望の色なる綠色を生ず。地は此の如くにして大に潤飾せらるゝなり。時に彩色絢爛たる金甲虫は來て「オー汝色よ、汝顏

料板に似たる背を有てる余をよも忘れはすまじ」と一聲嘯て其儘翼を鼓して何れへか飛去れり、

●危害を離れて安全なる兄弟姉妹　（第五十、五十一ページ）

此小兒の遊戯に於る両手の位置は極て簡單にして圖解によりて既に十分明かなり、唯其指の把握は歌の意味と進行とに連れて徐々なるべきを注意す可きのみ、小兒の養育に於て最も精緻にして又最も重要に且つ困難なるは其最も高尚なる極内の生命、即ち感情智力及び先天の預覺を發育することに在るなり。此先天の預覺こそ是れ將來人生に於て最も高尚にして神聖なる凡てのもの丶由て萌芽する所にして、後來宗教的生命即ち神と一致したる心性、思想及び行動の生命となるものは即ち此先天の預覺に外ならざるなり。然らば何時、何處に於て此生命の顯露始るか、蓋し是れ猶ほ植物の種子と其萌芽との如きなり、植物の種子と萌芽は其外見

に現れて吾人の知覺に入るに先ち既に久しく未だ現れずして存するなり吾人の心裡に在る先天の預覺亦此の如きのみ。天文學は亦星を以て此理を示せり見よ彼天空に燦然たる星は其星輝の未だ吾人の眼中に達せざるの以前既に久しく蒼天に輝きつゝありしものにあらずや、

此の如く我儕は何時、何處に宗教性即ち神と一致の性が小兒の心に發達し始るかを得て之を知らざるなり。若し誤て時期未だ熟せざるに其敎養を始むるときは恰かも穀種を播して日光雨露に曝らすの早きに過ぎ、酷に失するが如く適々其軟芽を害して止まんのみ。その晩きに過ぎ、弱きに失するの結果亦同一なりとす。然らば我儕は如何にす可きか、如何にして內に存する宗敎的生命を外に發露せしめ得るか如何なる外相と內部に潛む宗敎的生命とを相聯結せしめ得るか、實に如何なる外相を以て其生命の開發せし外部の發現として之を見る可きか、我儕は小兒の兩手を合せ若しくは褶むことを以て其發現と爲す可きか、然らば此兩手を合し兩手を褶むことは果して內部の宗敎的生命に何の關係かある、斯る偶然なる外事が如何

にして此内部なる特に人間の極内深奥の所にあるものと必然の關係を有し得るか。若し兩者の間必然の關係ありとせば何物か此兩者に貫通したるものありて存せざる可らず、其貫通したるものとは何ぞや、所謂一致なるもの即ち是なるに非らずや。さらば兩手を合せて之を禱むの事は決して偶然の事に非るなり、否な人性の一致に基ひて深く其心裡に存する一致の念を思はず外相に發表せし最も普通なる現象として之を見るべきなり。此事たる尚ほ深く之を證明するの方法なきに非ず、然れども今之を詳論するの暇なし、此處にては唯兩手を合せて之を禱む事の宗教的一致を表はす事なるは決して偶然の次第に非らずと斷言するを以て滿足すべし、

此の如く今我儕は至内的生命の結合を發表する外相に關し明確なる說明を得たり、唯小兒は未だ此事に關して教養せらるゝの度に達せざるのみ。此理由よりして我儕は此一致の外相を得て之を以て同じ天性を教養して更らに深く之を喚醒するの手段を得るなり。誰れか彼天使の如き小兒が其心裡に存する生命の一致を發

表せんと欲するとき必らず好んで其小さき兩手を合して之を褶むの事實を知らざるものあらんや。懇切に至內の生命の結合を教養することは決して有害に非るなり、何となれば凡ての發達は必らず內部生命の結合を促進するものなればなり。此歌と題詞とは自ら此一致の意味と聯結せり、既に自己の心裡に心靈上の一致を得て之を神聖に保持する高尚なる母は其子を教養するに當り兒童の心裡に亦此一致を得せしむるを以て其當然の義務と感ずるは是れ人情の自然なり。我儕は既に小さき指は小さき兒童並に幼なき小女と看做す可きを示し、且つ小兒は自己の利となりて害とならざる限りは他人の生命の鏡中に自己の生命即ち其至內の心靈的生命を寫し見ることを好む者なる事をも述べたり、

●塔上の兒童　（第五十二[三]ページ）

此遊戲は既に題詞に明かなるが如く菓子もみの遊戲を始めとしあらゆる手と指

の遊戯を集合せしものなり、最初には両手相離れ居り「而して彼等が相合ふとき」てふ詞を合圖に共に其手を打鳴らすなり。其他手の姿勢は此短歌と前々の諸章の歌とに由りて容易く推想することを得可し。祖母の教會に行くときの指の姿勢は左方の圖に示し、神を讃美し感謝する仕方は右方の圖に明かなり、屈曲し又は褶みたる手の姿勢は前圖に就て之を見るべし、

巧みに排置せられし四つの圖は母が善く問ふことを好む小兒の問に答ふるが如く圖自ら容易に説明を與ふるなり、即ち左の下方の圖は二人の祖母を先導として來る小兒の訪問を表はし。右の下方なる第二の圖中には小籠、小さき巢、鳥卵、鳩の舍水呑、球などの事なぞを語らひ合ふ小兒と其上方に對坐して小兒の親しく遊ぶを見て樂む二人の祖母とを描き出せり。第三圖には教會に行きつゝある二人の祖母と塔の方に走り行く小兒あり。右の上方なる第四圖には崩壞れたる塔と、危難より救ひ出され感謝しながら出で來る子共とあり。此外圖中の事柄を能く考察し前々に述べ來りたる種々の遊戯と照合し之を實際小兒の養育に活用するは慧敏なる母

のよくなし得る所なり此上更に詳細なる說明を下すは母の能力をなみする所以なれば今別に贅言を加へざるべし、

●幼兒と月　（第五十四、五ページ）

此圖は殆んど說明を要せず。母たる者孰か小兒の月を看るを喜び、而して之を看る間は其心に存する子供ながらの心勞をも忘れて之を樂むの禀性あるを知らざらんや。彼等が成人となりて後も亦斯の如く世の辛苦艱難に遭遇せる時屢々高遠なる光明を仰ぎ、生命の源泉を望みて一時暫且の疾痛を忘るゝ事あり。顧ふに此短歌は思慮ある母をしてよく小兒自然の要求に適合しながら夙に此顯著にして重要なる禀性を敎養せしむるの一助となるべし、

●一歳半許の男兒と月　（第五十六、七ページ）

此歌は生れて一歳半ばかりなる小兒の爲す事柄を有體に記載せしものにして此題詞は即ち小兒殊に童兒の生に於て屢々見る所の此顯象に於ける一層高尚なる表號的觀念を説明するものなり、我儕此題詞を讀むときは我儕が現に爲す所よりも一層多く小兒をして月と星とに關する思察力を發達して其快樂を享受せしめ其月に向ての熱心なる注視を我儕の同情缺くるがために之を空しからしむるが如きことなく、善く之を導て月星に關する正確なる理會を得せしめざる可らずとの感念を深くせずんばあらず。此の如くして例へば月の球形にして大空を運行することなどを明白に見得せしむるを得べし。加之次に解説せる如く内部生命の一致を外界の顯象中に知覺せんと欲する小兒の時代に在ても、理會し得らるゝ丈けの造物主の性質は夙とに之を感知せしめざる可らざるなり、

小兒は其未だ自ら理解する能はざる物に遭遇するときは之に關して大人の與ふる説明は眞僞を問はず容易に之を受け容るゝものなり。最初幼兒に對し月は是れ

一個の人なりと云ふも、空中を流行する美麗なる輝ける球なりと云ふも、或は又星は黄金の小點に過ぎずと云ふも、無數の燃ゆる光と云ふも、抑又我を距る遼遠なるが故に斯く微なりと雖ども其實は光輝赫々たる太陽なりと云ふも、小兒の之を信ずる更に異同あらざるべし。月星の活けるが如く見ゆる外相につきて以上の說明中前者は唯死せるものなりと雖ども最後の說明は確證ある智見に導きつゝ活ける發達の根基となるものなり。何故に小兒をして最後の說明に近づかしめんとはせざるか。眞理は決して害をなさず之に反して誤謬は偶々眞理に導くが如きことあるも常に有害を免れざるなり、

●二歳未滿の小女と星

（第五十八、九ページ）

此圖と歌とは前章のものと殆んど相同じ、唯其異なる所は少女と二個の星とに在るのみ。通例薄暮より夜に亘りて輝く所の二個の星は蒼空にて相接近せる二個の

遊星なり。誰か小兒が萬物の中に人間的關係を見んと欲する動念を有すること丶其必要とを知らざるものあらんや。小兒の語ることの往々思慮あることは實に著しきものにして何人も彼女が如何にしてかゝる觀念の聯合と事物の比較とに達したるかを說明し得ざる程なり。然れども出來る限り永く且つ漸次に此動念を養ふことの小兒の心靈と生命とを强壯にする所以なることは決して疑ふ可きに非ず。斯くて此題詞に於て特に顯著にせんと勉めたる一觀念即ち「唯一の靈、萬物の中に在り萬物の中に働らく」てう觀念を發達せしむるを得るなり、

●壁に映する影鳥

（第六十、六十一ページ）

人の身體は耳目鼻口四肢百體より成り、其思想感情は千種萬態變化極りなしと雖ども、其中には自ら相連結して分割す可らざる内部の一致ありて存するなり。故に小兒は部分の思索に先ちて必らず生命の一致を自覺せざるなし。而して個々別々

の能力を考察し之を養成せんとするに先ち生命の完全統一を確然知覺し活ける眞理として之を心に感ずることは小兒の生涯を通じて其内部及外部の發達に最も重要なることなり。四肢五官の活動は各其官能を異にせり故に其發達の初に當てや互に相反動せざるなく、手の遊戲と脚の運動も必らずや亦視官の働を喚起す我儕は小兒が月界に達せんと欲するに當り其視官の刺激か如何に身體と四肢との活動に反動するかを注視せざる可らず。又視官の刺激と同時に小兒は聽官をも用ゆるを要するを知らざる可らず、試みに思へ凡百の事言語と音調との伴ふあるときは如何に小兒の心に働く樣を異にするかを。母か小兒の爲めに萬事を爲すに當てや、別に思慮を須ひず唯其母たるの本能性に皷動せられて、小兒が未だ嘗見して問ふことすら爲さゞるに早く既に其爲す所の事には必らず言語を添え其言語には必らず一々其場合に相當せる特別なる抑揚を加へざるはなし。然れども言語と音調の知覺及び聽官の喚醒、開發並に其練習は亦常に視官の媒介に由るを見るなり。實に小兒發達の初期に於ては其感官の動作何れも個々別々にして更に相互

の聯絡なきことは苟も其手に觸れ目に見ゆる所の物は彼此の差別なく皆直ちに其口に入るゝを見ても明白なり。然れども久しからずして視官は檢定者とし、整理者として聽官及び其他の諸感官の上に坐を占むるに至る。かの最も深奥に坐する心靈すらも視官によりて自ら人の前に顯露し來るを常とす。是故に母は小兒に向て「愛兒よ汝の淸らかなる瞳子を通じて予は汝の心を見る」と曰ひ而して吾人も亦小兒の生涯に最も重要なる所の健眼を見れば往々之を呼ぶに高尙なる心靈的の意味を含める名稱を以てし「賢そうな眼」と稱するなり。故に我儕は主として視官の運用を要求して「ア、兒よ注意せよ汝の四下を見よ」と言はざる可らず、若し眼ありて見ること能はず「我子よ汝は見えず又聞えず」と言はざるを得ずんば其悲痛如何ばかりぞや、此等の言辭に由りて我儕は小兒の心身の幸福に關して視官の甚だ重要なるのみならず亦小兒の心靈開發の中心點たるを認識せざるを得ざるなり蓋し小兒の心意と生命とを教養せんには視官實に其開發の源泉にして亦其發達の起點たらざるを得ざればなり、

此の如く吾人は相反する二途よりして此等の遊戯と唱歌との補助に由り小兒に與へんとする凡ての教育の中心及び起點は如何なるものなるかを明瞭に曉解することを得たり。此教育の方法こそ小兒の天性の唯一なること及其生命の健康を傷ふことなく又其温き感情を冷却することなく圓滿不偏なる存在者として其心靈の總ての活力を開發することを得る所以の方法なれ。我儕は小兒をして「視る」てふ語の最も完全にして高尚なる意義即ち視ると感ずるとの二義を悟らしめんと欲するなり何となれば萬物を一目の下に集め愛の眼を以て之を見る所の完全なる視察は先見を以て照臨する愛の神の最も高尚なる性質なればなり。顧ふに我儕を信任せらるゝ母は更に聰明なる眼と、深博なる智見と、圓滿なる精神とを以て我儕の既に示したる道を尙ほ遠く探らんと欲せらるゝなるべし。蓋し我儕が今より兒童教養の爲に取らんとする所の道は實に兒童自然生々の嗜好を開發し之を運用せんとするに在るなり、

偖今より此遊戯の事を考究せんとす、元來此遊戯は都市と田舍とを問はず如何な

る階級の社會にも善く行はるゝものにして我儕は幼時より此遊戯の我家族の中にも亦行はれ我儕は屢々之を以て我小妹を娯めたることありしを記し居れり、偖滑澤なる鏡面に日光を受け之を陰暗らき壁上に向て動かすときは閃光閃々壁上に動くを見る可し、杯水を以て鏡面に代ふるも亦同じ、小兒は之を呼んで影鳥とは云ふなり此歌と題詞とは此遊戯に於ける高尚なる意味を說明するに足るべしと雖ども、亦是れ前章及び後章の遊戯に於ける歌と題詞との如く此遊戯より得る唯一の意味には非るなり。此歌と題詞とは此遊戯に由りて小兒の感じ、且つ理會するに最も善きものにして又其心を喚醒する、最善のものたるには相違なしと雖ども、唯これのみを以て此遊戯の意を盡したるものと爲す可らず、此等は畢竟此遊戯に於て人々の知覺せしこと、感發せしことを永く堅持してよく之を照合し、以て之を小兒の啓發に用ゆるの雛形たり、道標たる爲めに與へられしものに過ぎざるなり、「母上よ彼小兒の手に持てる物は何なるや」、「小さき鏡なり」、「鏡を以て何を爲すか」「日光を捕ふるなり」、「それは亦何の爲めに」、「向ふの壁に光の閃影を寫して彼の小

弟を娯めん爲めに」、「ア、それにて了解するを得たり丁度小さき鳥の如くに見ゆ」「然り弟にも其樣に見ゆるを以て彼は鳥ならんかと思ふて之れを捕へんとするなり」、「母上よあなたの鏡を貸して下され、私も之を試み見ん」、「此水を入れるるコップにても爲し得べし、併し之を破損せざる樣注意すべし」、「母上よ見玉へ私も之を爲し得るなり」、「勿論爾にも出來ぬ筈はなし」、「母上よあなたが若し之を爲し玉はば私は其鳥を捕ふべし」、「捕へ得可くんば捕へて見るべし」、「アー母上よ此鳥は捕ふること出來ず私が確かに手の下に捕へしと思ふときは、モー手の上に輝て居るなり」、「左なり、此鳥は唯輝ける現象のみなれば、決して捕へ得べきものに非るなり何物にても決して捕ふること出來ざるなり」、「母上よあなたも亦私を捕へること能はざるなり試みに追及して見玉へ」、「よろしソレ今捕へたり、爾は光の如く迅速ならざる可らず」

見ようつくしき　少女子が　長き紙切　手に持ちて　やう〳〵高く　之を引けば　小猫はねらひを　定めつゝしきりに之を　捕らんとし　されど短き

足を以て　かゝる賞美を　得んことは　無益よ無益よ

「母上よ此圖に在る小兒等は何を爲し居るか」、「彼等は蝶を捕へんとして居るなり二人の小女は網を以てし、此兒は手を以てし、彼の跪て居るものは手拭を以て之を捕へんとせり、されども蝶は忽然として飛び去れり」、「墻の傍に在る小女は何を爲し居るか、彼は靜かに立ち居れり」、「汝は彼女が全身を伸ばして居るを見ざるや、彼女は墻を越え往て小兒等を助けんと思ひ出來る丈け伸び上がれども墻を乘り越ゆること能はざるなり」、「母上よ、男兒は墻を乘り越すことを得るなり、私も亦之を爲し得べし、何故彼女のみは全く攀ぢ上ることを能くせざるや」。「汝は彼の兄弟か墻下の燕を捕へんとするを彼が見て居るを知らざるか、併し燕は飛去りて最早見えざるなり」、「尚ほ外に二人の小兒あり併し彼等は靜かに坐し居れり慥かに彼等は何物をも捕へんとはせざるなり」、「併し愛兒よ彼等は何物かを確かと握り得たる樣に見ゆ、何を得たるか推量して見よ」、「私には分らず」、「今や太陽は彼方の湖水の上に沈まんとして其色甚鮮かなり、彼の小兒等はいつまでもかの黃金色なる夕陽

の光線を堅持し得べし。彼等は之を得ること能はざるべきか」、「母上よ夕陽は既に湖水の彼方の小丘の陰に沒し去りたるに非らずや、其光線は唯現象のみ、如何にして之を堅持し得んや」、「併し彼等はそれを緊かと持ち得るなり」、「否な母上よそれは到底能くす可らず」、「併し彼等の眼に由りて彼等の心中に緊持し得るなり。汝は甞て汝の父か汝と別るゝに臨み告別せしときの慈愛に滿てる恩顏と其眼色とを今に記憶せざるか。汝は近頃其事を私に告げしに非ずや、我父は速かに歸り玉はざるやと問しとき汝は再び彼を汝の心中に見ざりしや」、「ア、然り、母上よ、私は常に我父を見るを得るなり」、「されば汝は父上の在まさるゝときにも父上を見、之を堅持し得ることを悟らざるか」、「ア、左樣、私は其れを爲し得るなり、母上よ私に心靈あるが故に」

●墻壁上の兎（第六十二三ページ）

此遊戯は視官の習練に必要なるものとして廣く世に行はるゝものなり、今此に十分精密なる圖解あれば別に説明を要せざるべし。此遊戯は朝夕は日光、夜分は燈火を借りて行ふものにて、其巧者なる人の運動及び姿勢には種々の變化あるを以て稍長じて自ら此遊戯を爲し得る小兒は特に之を好むなり。余は確信すらく常に新なる娯樂を小兒に與ふる凡ての遊戯には人間の蕾なる小兒は勿論又凡ての大人の爲めにも有益なる眞理の標識ありて存せざるなしと。又信ずらく無邪氣にして快活なる小兒の中には人生の最も純潔なる喜樂即ち明快なる心意着實なる心情及び精醇なる靈魂の喜樂混々として湧出するものにして是れぞこれ彼等小兒を導て造物主と共働し且つ感通する眞成なる心靈的生活に達せしむる所のものなれと、

如何にせば兎を壁上に現はし得るか、

皎々たる光明と其照す所の平滑なる白壁との中間に一個の暗き物體を差出すべ

し、さらば快活なる影畫は明了なる形狀を以て躍如として壁上に現出すべし、是れ唯此遊戯の外觀のみ、思慮深き者は必らず其中に深意の存するを發見し得べし。思ふに下に述ぶることの如き蓋し其意味の一ならん、彼の生命及土地の暗黑なる形相も一旦神の靈光に照して之を觀來る時は平靜淸心なる人の目には一層高尙なる生命の影像と見ゆるなるべし。例へば彼の怪岩怒立する怕ろしき地も日光之を照せば幽靜佳美なる勝區となるべく、世界第一の絶景も其美しき諸點の日光に照らさるゝなくば忽ち其風趣を失ひ荒涼殺風景の地となり了るべし。又昨日は高尙なる心靈に照されいと樂しく感ぜられし境遇も今日其光輝かざる時は其喜樂忽ち失せて空渇枯凋の有樣に陷り唯厭忌悲痛すべきを見るに至るべし。之に反して其初めはいと冷かにして物寂しく見ゆるものも一朝高尙なる心の光に照らさるゝ時は大に我心を喜ばしむるものとなるべし。さらば外物をして此の如く悽慘に且つ嫌惡すべきが如く見えしむるものは畢竟我心意の所爲のみと明知確信するときは能く我心の喜樂を回復するを得るなり。之を要するに此思想と次章の遊戯

とは内外の生命即ち心靈の光と太陽の光との働らきに由りて兒童を導くの誘因と勢力とを與ふるなるべし、蓋し赫々たる日光の照す所には暗黑なる影像も明白限定なるものとして其形を現はすなり、

此遊戯をなす時大きさ異なりたる二手例へば母と娘とが同時に大小二頭の兎を異りたる位地に寫し出せば更に一層の興味を増すべし、

此圖は二頭の兎が茂れる森林中に其姿を隱さんとする樣に至るまで凡ての事を能く描き彰はせり、之に加るに慧敏なる母の注意深き説明を以てせば尙一層の明瞭を加ふべし故に我儕は又贅言を重ねざるべし、

●狼と猪　（第六十四、七ページ）

此遊戯も亦圖と歌と題詞とか既に自ら其説明を與ふる故茲に重ねて詳言するの要なし、壁上の寫影は指と指と相揃へ兩手を平たく合せ兩拇指をして耳の狀を爲

さしめ斯くて両手を開閉するときは自ら動物の狀を爲すなり、而して反覆之を試れば終に完全なる寫影を得べし、

母たるものは其子と共に動物を觀る場合には特に心して題詞の指示する所を考へざる可らず何となれば動物は往々其劣等なる天性を急激明白に現はし嬌軟なる小兒の心には強きに過ぐる程の刺激を與ふることあればなり。是れ動物のみに非らず人にも亦これあるなり。若し小兒をして神經質にして想像強き性質ならしめば特に其想像を潔淨ならしめ勉めて中庸を失はざらしむること最も重要なり。たとひ小兒に此等の癖性なしとするも輕卒なる言語に由りて誤想を起さしめざる樣に注意すべし。されば無邪氣なる兒童は自ら其純潔を守り動物を見るも「動物は更にこれより善くするを知らず」てふ明白なる眞理に由りて容易く之を說明し天然の現象を無害に看過するを得べし。大人小兒に論なく人は決して下等動物と同一なる者に非ず故に自ら其爲す所を知らざる可からず、大人は固より然り、小兒も亦之を知らずして可なりと謂ふ可らず。されば既に鳥の巢の章に於て說明せし

如く母は其兒をして動物が各忠實に其天性に順て發達し、よく天然全體の生命と相一致して働くことを注意考察せしめざる可らず、上は動物より下花艸に至る迄其生命の斯くも健全に、新鮮に、喜樂なる所以は正しく唯此理由に在るなり。凡ての動物が其發達の各程度に於て常にその恣に變ず可ざる天分を完成するが如く人も亦小兒の時より凡て發達の時代を貫て忠實に其天職即ち命運を完成せざる可らず。兒童をして夙とに將來負擔す可き多方の義務を完成するに必要なる準備として其發達の各一程度に於て必らず之れに相應する職分の存するありて決して避く可らざるものなることを明白に瞭解せしむるは寔に重要なることなり、人は其年齒に係らず各相應なる義務と心勞とあるものにして小兒と雖ども亦之れを免れず、而して其有意と無意とを問はず能く其義務を成すものは實に幸福なるものなり。義務は決して重荷に非らず、能く義務を盡せば遂に之に導かれて光明の心地に達し高尚なる天福を享受するを得るなり。されば活潑なる健兒は明白簡易に且つ果然として其義務たることを說明せらるゝに於ては好んで之を成さん

ことを欲するものなり。義務を完成することは能く身體と心意を强壯にし、而して成功の自覺は兒童の喜ぶ所の獨立の感覺を生ずるものなり。見よ兒童が其小さき義務を成したるとき如何に幸福なる感情を有するかを是實に兒童をして幸福なる自重の念を生ぜしむる所以なり。忠實に兒童の多方性を研究し善く之を撫育し以て其性を完ふせしむるものは實に幸福なる人と云ふべし、

●二個の窓　（第六十八―七十一ページ）

此兩圖に於ける手の姿勢は一見して明白なり。凡て兒童は指と指とを組合せたる間隙或は切拔きたる紙の孔等凡て狹き間隙より光を窺ひ見ることを好む者なることは皆人の知る所なり。此事實は即ち是れ人心の有限にして高尙なる靈性的光明を無制限に吸收するの能力なく。赫々たる光輝を制限なく射込まるゝときは徒らに其靈眼を眩惑するのみにして決して之を解釋し又は之を再現する能はずと

の理を暗々裡に告白するものと謂ふべし、
此遊戯は日光又は燈火によりて之をなし得べし、
心靈の習練に關しては此遊戯は前二章の遊戯に比し積極と消極の相違あり。前二章に於ては勉めて野卑にして凡俗なる情性を喚起せざる樣に注意し、此章に於ては寧ろ高尙なる感情を喚起して之を發育せんことを欲するなり。されば母たる卿は既に純潔清白の中に兒童の快樂を養ひし如く、今は亦灼燿たる光明の中に其快樂を養はざる可らず、
見よ、兒童の全心は其愛する所の光明の現象に吸收されたるを何物か光明の知覺及感化の如くによく兒童の心靈を有益に繫ぐことをせんや。卿の兒童は既に此先天的豫意を有てるに似たり、
「心の清きものとなれ、智慧の設計せしものを取りて之を實行するものは更に勝りたる智慧者にして於是か最も高尙なる進歩あるなり」。之を爲さしめんが爲に母は其子の心身を强壯にすることを勉めざる可らず。而して父たるものは兒童をして

其生涯の春時に於て早く純潔と高尚なる品性に達せしめん爲め大に其力を致さざる可らず、

「彼兒童は何故思案の體にて窓下に立つか」。彼は如何にして此輝ける日光が清水の底まで照耀して斯くも美しき種々の光色を現はすかを考へ居るなり。「母上、父上疾く來り玉へ、姉上は日光のさし入る窓下に清水を盛れる「コップ」を持來りしにアレあの通り美麗しき色の圈と光線とが恰も虹の如く又露の如く顯はるゝなりアー母上よ實に美麗なることには非ずや。見玉へ姉が「コップ」を搖すとき彼の各種の色が恰も汝と私等とが兎遊びを爲すときの如く互に入り亂れて閃爍たるを」彼の高尚寛仁にして勤勉なる人が兒童の精神と生涯とを純潔ならしめん爲め經營したる苦心の効空しからで、最も高尚なる幸福の花の咲き出でたるを見し時は其喜の大なる實に兒童が彼の光の美麗なる現象を見て嬉樂措かざると一般なるものあり、

さらば母たるものは兒童の好む無邪氣なる快樂を汚さぬ樣に之を補助せざる

可らず、
「併し彼の上圖にある童兒は何故に泣き居るか」。彼は何氣なく窓硝子を打破りたり然るに暗らき板や不透明なる紙にて之を繕ふては清く輝く光明をして室内を照さしむること能はざるを以て彼は今止むを得ず遠く硝子舗にまで行かんとなし居るなり。されば我儕の兒も輕浮不注意に由りて此の如く將に心靈に入らんとする光を妨げざる樣にせざる可らず。若し一旦心靈中に暗黑を生ずる時は之を驅逐する爲めには幾多の勞力を費し幾多の時間を犧牲にせざる可らず。然れども若し右の方なる小兒の如く適當なる時機に於て眞理の光明に向て其窓戸を開くときは恰も日光が陰暗なる土窖に照し入るが如く直ちに生命の暗鬱なる深淵に透徹して其心の隅々迄も照す可きなり、

清き眼と　動悸うつ　其心とに　天然は　おのが榮光をあらはして　汝と
離れず　住むぞかし

次の圖に畫かれたる母の膝掛の上なる二人の兒童を見よ其一人は母の腕に抱か

れたり二人共如何にも滿足の態に見ゆるに非ずや。彼等は旭日の昇るを見つめ居りて少しく疲れしもの〻如し。其時小さき兒童は妹に向ひ「來れ來りて暫時花園に行かんことを母に求めよ」と

然り我子よ、行けよ行け　　花は盛になりにけり
花の如くにうつくしく　　光の如く、かゞやきて
心を淸くもてよかし

●炭燒人の小屋　（第七十二三ページ）

兩手の姿勢は明白に圖に示されたり而して手腕は机の如きもの〻上に在り。既に說明せし如く視官が他に勝りて人の內界と高尙なる靈界との交通の機關たるが如く、手は亦特に心意と其周圍なる觸る〻を得可き物體世界との交通の方便たるなり。而して異日靈性的思想か視官に於て其形を實にするを得る所以は全く此實

際的器械の力に由らざるを得ず、此準備を爲さんが爲めに手は兒童の遊戯の狹き範圍に用ゐらるゝなり、

人は唯左右相反せる二手と四本の指一對と両拇指と有るのみ而して拇指と他の指とは互に相對向して反て相制するものに似たり。然れども此二手十指によりて人の爲し遂ぐる事柄や其數實に窮なく又兒童は之を以て限なく多くの遊戯をなし得、以て許多の快樂を享け自然に其性情の醒起を遂げ得るものなることを思ふときは實に其作用の無限なるに驚歎せざるを得ず、此事實は兒童に向て自己の分限を超えて種々の材料を借り來らずとも其掌中に在る僅少の物を以て如何に多くの事を成就して綽々餘裕あるを得べきかを知らしむるなり。英人某曾て父なる神の親切、慈愛及び至善を人に顯はす十分なる確證は唯一の人の手にて足れりとて之を證せんが爲め一冊の書籍を著はせしは實に正當なる事と謂ふべし、蓋し細小卑近なるものこそ却て如何にせば小なるものより多くのものを造り出すを得可きかを考ることを人に敎ゆるものなればなり。顧ふに是れぞ人に神性あるを表

明するものに非るか、是れぞ人が彼の最も卑近にして且つ最も微小なるものより斯く多くの物を創造し玉ひし神に類似せるを顯はすものに非るか。此の如く兒童の手を重んじ其手と其手の作用に就き熟考することは、夙とに其心裡に其手を濫用して自己と其手とを害することなく反て其行爲に於て其創造者なる父なる神に似んことを欲するの精神を喚醒する所以となるべく。又此の如く兒童をして其自己の手を貴重せしむる時はそれと同時に兒童をして天父即ち其手を以て「パン」を供へ凡て肉體の需要を充たし玉ふ神を尊敬せしむるを得るのみならず、又彼の卑賤なる勞作者の勞働を見て是實に一個人並に人類社會より害惡と危險とを驅除するのみならず又往々直接に人類の福祉を增進するものなりとして之を尊重するに至らしむることを得可し。若し煤と炭粉とを以て其顏面と毛髮とを染めたる炭燒爺ありて意を用ゐて木炭を燒かざりせば吾人は學術技藝の習練に於て今果して如何なる位地に立つ可きか、化學に關する天然物の研究に於て吾人は今果して幾何の進歩を爲し居る可きか、

煤けたる胸　よごれし「シヤツ」　其下にこそ正直と　無邪氣と德義は　住まふなれ

●大工　（第七十四、五ページ）

此遊戯に於ける兩手の姿勢は之を說示すること頗る困難なれば唯圖に就て熟視されんことを望むのみ然れども今少しく之れが說明を試みんに兩手の姿勢は大概は炭燒の章に於けるものと異なるなし、唯此章にては前章に於ける如く手を臺の上に置かず自由に保持するの差あるのみ、斯くて小指、無名指及び中指の頂きを輕く相接せしめ、唯食指のみ自由に動搖するを得可らしむ、然るときは左手の食指は一株の樹を表はし右手の食指は鋸を以て樹を切倒す大工を表はし、左手の食指は今右手の食指に斬られたる樹となりて橫さまに倒れ、其指尖は右の食指の指節に接すれば右手の曲りたる食指は大工が今將に其樹を鋸り居るの狀を示すなる

べし、而して此圖の手と指の姿勢は亦宛然たる家屋の狀形なり、屋弟あり、窓牖あり門戶あり唯門戶の小に失せるを憾むのみ、

兒童の身體の潔淨にして其四肢五官の習錬、周到に規律正しく其使用皆宜しきに合ひ而して其衣服亦恰好にして淸潔なることは彼等をして家庭の務めを爲すに容易ならしめ家族の生活を快適ならしむるに與て助あり。之と同じく家屋の構造其宜しきを得て諸部相稱ひ、秩序整然たることは亦大なる影響を家族の生活の上に及ぼすものなり、家屋の全家族に於けるは猶ほ外皮の全身體に於けるが如し家族の外圍を包みて其外部を擁護するの外皮は實に家屋に外ならず家族生活の幸福は其家內に住む人々の健康に關すと同時に亦適宜に整理せられたる家屋に關すること決して尠小ならず、顧ふに家屋と房室とは最も高尙なる家族的生命の養育所たり避難所たりとの先天的預覺は兒童が家室を作るの遊戲を好む所以の理由を說明するに幾多の光明を與ふるなるべし。蓋し人生後年の正眞にして重要なる生活は正しく彼の眞摯醇粹にして未だ室家以外の經驗より得來るべき暗鬱な

る感情、衝動の何たるを解せざる兒童及青年の胸裡に横はる所の先天的預覺の綿々たる連續中に存するを見るなり。若し兒童の幼時に當り夙とに凡ての先天的預覺を養成して之を强固にし且つ之を開發することを得、而して其一層高尚なる意味に於て之を以て青年のために保護の天使たらしむるを得ば其幼年より大人に至る迄凡ての生涯に如何に著大なる變化を來す可きか實に我儕の想像の外にあるべし、

圖の右方なる兒童は自ら材木となりて二人の小女に之を鋸らしむるの狀を爲し左方の愛らしき二女は沈思默考して今建て終りし家の傍に坐せり、蓋し是亦彼等の胸裡に存する一種の預覺即ち骨肉相親み室家團欒の樂を享けんには多くの献身と忍耐とを要すとの預覺により不知不識此の如き事を成せるものなるべし、然らば此小さき頭腦は何を考へ居るか此幼なき心は何を感じ居るか、美しき家に住むことのそのたのしさは如何なるぞ、

されば我等は潔くうれしき思想の湧出でゝ活きたる生涯の物語其物語は神

聖の意味にて語らるゝ事を見ん

左の下方なる母は既に左の意を兒童に曉解せしめんと試むるに似たり、

貴重すべきは　大工の技術　彼もし職務を　よく成さば　我また彼を　尊敬せん　大工がもしも　丈夫なる　家を作りて　與へずば　母はかはゆき子と共に　何處に安く　住まふべき

●橋　梁　（第七十六、七ページ）

二本の拇指を以て二個の橋桁に擬し、他の諸指を其上に支へ、一の中指の指頭を少しく曲げて他の中指の下に置き、次で各指互に相支るを得せしむべし。小川の両岸の如く互に相隔離して見ゆる反對の両極を連接することは快活、慈恵の働きにして實に感謝するの價値あるものなり。母たる卿は其兒をして夙とに之を感ぜしめざる可らず、蓋し不整頓にして相反對することは家族の生活に最も深き苦痛を與

ふるものにして、之に反して意外の一致は言ふべからざる平和を來すものなることは何人よりも卿の最も強く感ずる所なるべし。何物か家族の生活に勝りて天地の懸隔ある最も大なる反對を能く一致せしむるものぞ何の處にか家族に於ける融化よりも更に勝りたる幸福なる融化を致し得る所かある。故に兒童に教示して天賦の外觀の中に之を通じて達し得可き内界の思想あることを室家即ち平和なる家族の生活中に於て認識せしめ、又彼等をして外部の知覺すべき物の授與者を認むる中に自ら又内界の知覺すべからざるもの丶授與者を識らしめざる可らずしめ、以て其裡に於て人生の最大至難なる反對の兩端を平等にせしめ、又夫をして彼の大工の子を送くりて人間の住居を作らしめ以て室家を形成することを得せしめ、心の喜樂と靈の平和との永く住まる所即ち所謂天國の住家たらしめ玉ふたる神に感謝することを教へざるべからず。橋の圖よりして此等眞理の一班を教へ如何にして獨立の働の中に反對の兩端の中保及一致を看出すべきかを悟らしむべし、若し未だ十分明細に之を悟らしむるに適せずばせめては彼の先天的預覺によ

り暗々裡に之を默悟せしむべし。卿の生涯、行爲によりて之を示すべく、又特に大工の子の中保者たる生涯と其實例とにより此事理を深く兒童の心に刻せしむべし。よく斯の如くなるを得ば母又は兒童の手を以て擬似せし橋梁又は之に類したる總てのものは兒童をして異日見る可きものと見る可らざるものとを聯結せしめ且つ大工の子に就て萬有の父の愛子にして人と神との中保者たるものを認め之を愛するに至らしむるの方便となる可きなり、

●二個の門　（第七十八―八十一ページ）

手の姿勢は何れに於ても共に兩手を接近せしめて門の形に擬せしものなりと雖ども牧場の門よりも花園の門の方寧ろよく眞に迫まれり、此等の遊戯の意味及び性質は容易に說明するを得べし、前者の牧場の門は兒童に其所持する物を保存すべきことを教へ。後者は兒童をして四圍の諸物體を認識し先づ家に

在るもの、庭に在るもの、花園に在るもの、野に在るもの、次に平原に在るもの、森林に在るものゝ名を唱へしむるに在り、且啻に其名に由てのみならず亦其品質に由て物體を知ることを敎へ啻に能動的品質卽ち其動作のみならず又其所動的品質卽ち其性質を知らしめざる可らず。母よ卿は曾て兒童の心中に此活潑なる感覺の深く潜伏することを考へ得しことありや、時至れば兒童は實に奇異なる方法にて活動と性質とに對する言語を自然に發見するものゝ如く見ゆ。見よ此時に至れば兒童は如何に滑なるもの、毛の如きもの髮の如きもの、輝けるもの圓もの回轉するもの匍匐するもの、跳舞するものに注目することを好むかを、又見よ實に不思議なる程迅速容易に知覺言語及觀念を把捉して之を聯結するを。されば心して兒童の心中に存する此感覺を保持し決して之が養成を忽にす可らず、若し此感覺を養成せず又正しく之を習錬して運用せしめざるときは此能力次第に銹腐して遂には全く消え失するに至ること宛かも彼磁石の十分に使用せられざるときは遂に銹びて其力を失ふが如くなるべし。又近く喩れば此感覺は破れたる盃子に盛れる高價

なる葡萄酒の如くなるべし直ちに之を用ゐざるときは其力は永く亡失して回復の期なかる可きなり、

母よ卿は生垣の忍冬の如く相對して生長する花其他羊の群れるが如き白き花を能く知るなるべし、さらば

小兒が花より、朝夕に　學ぶ課業は、幾何ぞ、
其美色其柔和　其天眞其華麗
或は鐘に、似たるあり　又は星かと、見ゆるあり
騎兵の如く、連なりたる　圈をなして、咲く花もあり
また花束の、有樣に　身を縛らるゝ、時もあり
もし健康なる、眼をかりて　見なば直に、適したる
文字をば之に、與へ得ん　されば勵みて、能力を
養ひ勉めよ、其母よ　今木の種は、蒔かれたり
遂に生ひ立つ、時を得て　子供と母に、幸福の

美しき花を授くべし

左手の指を褶むで花の形を作くり例へば百合花に擬し右手の指を攫み合して水壺と爲し拇指を以て水壺の口に擬しそれを以て花蕾に灑ぐ狀を爲し之れと同時に漸次に左手の指を開て花の自然に開き來る狀をなすべし、

●幼稚なる園丁　（第八十二三ページ）

一たび此遊戲を小兒に示せば直ちに之に摸すべし。兒童は母が其子を愛するの情に迫られて爲す所の事は何事にても好んで之を摸擬するものにして此小遊戲の如き亦大に兒童を娛ましむるものなり。兒童の有する摸擬の能力は母たるもの十分に注意して之を發育せしめざる可らず、母にして能く之を爲す時は既に其兒童教育の半を成就せしものにして、後日百倍の重みある言語を以てしても尙ほ其驗を見るに難き事も今は羽毛の輕きを以て十分に其効あらしむるを得べきなり。今

此事を忽かせに爲し爲めに後日幾多辛楚の經驗を甞めて後始て余の言の眞なるを覺るの愚を爲さず、今に於て早く我言の決して誤謬ならざるを信ずべし、何となれば斯の如く辛楚なる經驗により卿自ら是等の智見を得るとするも、かくては既に兒童教育の時期に後れ卿が辛ふじて得たる智見は適々以て卿の悲痛を增すの具となる外何の用をもなさゞるべければなり、

夫は偖置き我儕は彼の小園丁の事を忘る可らず。彼童男童女が花園を作り花卉を弄して娯樂する有樣は實に愛らしきものにして忘れんと欲するも忘るゝ能はざるものありて存するなり、

「看護」「養育」是れはこれ我儕相互の交通に關しても我儕が兒童の生涯に關しても常に用ゆる所の詞なり。此等の詞は愛子の生涯に最も重要なるものなり。我儕は何物を以て我儕の兒童に與ふべきか。思慮、堅忍、勇氣即ち生命を養成す可き勇氣とこれに達するの道程を示す可き方便とは兒童に與ふ可き最も重要なるものに非るか母も父も此等の詞を反覆せざる可らず。我儕は既に之を爲せり。卿等他年老衰の時

に至らば今日卿等の恩に感じたる兒童が懇切周到に卿等を看護するヿ恰も此圖中の小兒が全く一面の識もなき老翁に有らん限りの親切を盡すが如くなるべし、然れども適當に養育の道を盡さんには宜しく時と處とを考へざる可らず。直接に其根に漑灌することは凡ての植物に適すると謂ふ可らず、百合の如きは若し直接に其根に灌漑せば忽ち枯れ萎むべし。余は眞實に信ず園中に立てる思慮深く見ゆる小さき女園丁は我儕に告げて汝の植ゆる所の場所を考へよ」と云ひ遙か隔りたる丘上の風車は風のまに〳〵輕く旋轉しつゝ「時を考へよ」と告ぐるの風情あるを、

土さへ裂くる、炎天に　水打ちそゝぐ事なかれ
葉は枯れ〴〵になりはてゝ　外より與ふる養分も
取りて消化する力なし

結尾に臨み更に一事の考ふべきあり

いと美くしき、花園の　草木に培ひ、水まきて
育つるに越す、たのしさは　又と何處にあるべきぞ

枝を集めて、小屋を建て
人形をねせて、うちまもる
土かひ水まき、育てたる
花は自由に、咲き初めぬ
刺ある草木に、至るまで
今ぞ感謝を送りける
學ぶべきものは、何なるぞ
一をも失ふことなかれ
其快樂の、幾分を
心にとめて、學べかし
小兒の體と、心とを
心つくして、撫育せよ
子供の能力を、圓滿に

寢籠の中に、子供等は
勞力空しからずして
吹きくる風ににほひ來ぬ
美花を結びて、園丁に
かくて之より、兩親の
子供の如く、樂みの
子供のなせる、業により
いかに分ちて得べきかを
よき花園に、家を建て
害する危難を、防ぎつゝ
特に神より、賜はりし
發達させて、殘すなよ

父の愛もて此賜物　子供に賦與したまひしは
其忠誠の、功により　遂に子供を、天國に
招く聖意に、よるならん

●車匠（第八十四、五ページ）

半ば握りたる兩拳を垂直に立て而して交互上になり下になる樣に半圓形を畫きながら水平の方向に之を動かすべし、さらば孔を穿ち居る車匠の腕と手との運動に擬するを得べし、斯くて「絶えず、ぐる〳〵回轉す」と唱へながら車輪の回轉するが如く兩拳を縦に回轉すべし、

「凡て人間に關するもの一として汝に關係あらざるはなし汝は人なり故に苟も人間界の出來事は一として汝に知られざるものなし」とは是れ明智者の至言なるが兒童は常に此大なる眞理を實踐するものなり、

大人の間に存する事は一として兒童の注意を惹かざるはなし、就中特に其注意を惹くものは手工なり。我儕は既に人の手工の如何に重要なるかを述べ、其幼時に當り、夙とに之を重んずるの思想を養はざる可らざるを説きたり。手を以て製作することを好むの情を十分兒童の心裡に發達せしむべし、

子供の生涯を、活潑に　又勇敢に送らさんため
幼稚き時より、其心を　務と業とに、注がせよ
力と心の、いとつよく　熱心ふかき、働は
遂に望の、目的を　成就させつゝ、よろこびと
平和を受くるに、至らせん　もしも子供に、よろこびと
此平和とを、得させなば　働いよ〳〵勇ましく
正しき道に導くは　いと〳〵安き事ぞかし

而して此遊戯は此善良なる目的を達するに於て幾分の補益あるなり、
畫師は兒童に快樂を與へん爲め丁寧に此圖を畫けり。圖の左方にある手車の車輪

を始めとし右方なる貨車さては上方なる神々の戎車の車輪に至る迄所有車輪の用方と其特殊なる種類とは悉く此に網羅して遺すことなし蓋し畫師は車輪の人生に重要にして決して缺く可らざるを我儕に示せり、若し車輪微りせば人類の文明今果して何の處にかある可きか。凡て車輪形のもの丶能く兒童の心を惹くことは最も確實なる事實なるが實に彼等は後年に至り車輪の性質、用法、回轉等を考察して大に知得する所あるものなり彼尨大にして容易に動かし難く見ゆるものも僅小の動力を加るに由りて忽然動き始むるは是れ車輪の効用にして兒童が年長者の忠告に從ふに於て甚だ逡巡するの狀に頗る異なるものあり蓋し兒童が車輪を見るの始めに當り一見其勢力と重要とを發見せざるが如く始めに當りて亦未だ直ちに其忠告の勢力と重要とを認識せざるなりされども年長者の忠告の能く兒童を進行せしむるの勢力は恰かも車輪の車に於けるが如きあるは兒童の遂に覺り得る所なるべし、

此の如く車輪の性質と其用法とは圓、環、花環等と同じく標號的の意味に於て兒童

の心靈的の事情に從て能く教訓を覺知し易からしむるに重要なり、畫師は正しく此事を示さんと欲するなり、見よ二人の童兒の正しく相反せる方位に向て其箍輪を驅り而して其箍輪は一直線に其達せんと欲する所に達し、殆ど兒童の預想に反せるを蓋し畫師は此に由て大人及兒童の種々の運命は最上者の命令に據り各人の爲に最も善き所に導き至しめらるゝものなることを説明せんと試しに非るか、畫師が今又此に太古英雄の小説的時代を寫し出せしは如何なる意味あるか畫師は決して何の意もなく偶然に之を畫きしには非るべし。思ふに畫師は彼の天然と生命とを種々の點に於て忠實に思索し其中に存する善良なるものを能く保存する所の兒童に由りて高尚なる英雄時代が更に新鮮なる面相を以て再現せらるゝならんと預想せしものに似たり、

圖の右方の下に車輪を回轉し來る車匠は凡ての兒童に何を教ゆるか彼等能く自ら保持して倒るゝことの勿れとの事を教ふるなり、

（原圖には古代の小説にある神人の戎車を畫けり）

●小木匠（第八十六、七ページ）

此遊戯をなすには先づ両拳を垂直に立て斯くて鉋を引く如く始めは短く次第に長く「テーブル」の如き平面の上を滑動せしむべし、

此簡單なる遊戯の深意は何の點に在るか。音調の數と運動と相一致することは兒童の既に「指ピヤノ」の章に於て學びし所なるが、此の如く音調は數、時、空間、運動と內部の一致あるの外亦無聲の形及び特に物體と親密の一致ありて存するなり。若し物體長く伸張せらるゝときは其調自ら深く、且つ精微に短く引かるゝときは其調高し。時間と空間に於ける長短の對照と其關係との「概念」は兒童の生涯に於て最も重要なるものなり、「汝は暫時戶外に遊ぶべし、併し長遊す可らず」「汝は運動せざる可らず、併し唯暫時」などの如く母は長短につき種々の方面より小兒に之を理會せしめ二個の觀念の種々なる意味を知らしむべし。此遊戯と歌は之を爲すに善き機會を與へ、且つ前に出せる圖と遊戯とが曲直の理會を與へたる如く亦兒童の前途の爲めに長短の意味を明にするものなり。かの前出の遊戯の圖に於て我儕は到る處

に曲直の表出せらるゝを見、而して此圖に於ては亦長短の圖解を見る。兒童をして試みに娯樂の爲めに此二圖に就て類似と相違との點を見出さしむべし。此圖は又兒童を導て外觀の大は必らずしも内部の大を預表するものに非らず、外觀の小亦必らずしも内部の小を預表するものに非らずとの觀念に達せしむるなるべし。此觀念は亦軀幹魁偉なるゴライヤスと、兒童の親愛する短小なるダビデとの物語に由りて提起せらるべし。若し我儕にして我儕の兒童の感情を純潔ならしめ而して之に由りて我儕の心中に同じ感情を保たんと欲せば我儕は平和と神聖とを我心中に抱持せざる可らず、さらば我儕に祝福ある亦疑ふ可らざるなり、

● 武夫と善き兒童　（第八十八、九ページ）

兒童を膝蔽の上に凭らしめ左手を以て柔かに之を抱き唱歌の續く間之に和して右手の指を小指より拇指迄逐次に動かして兒童の方に去來せしむるときは騎士

の鐵蹄を踏鳴らし來るに擬するを得べし、

此遊戲と次ぎの遊戲とを以て我儕は兒童の心智品格及意志を形成するに於て一步を進むることを得べし。此迄爲せし所の事は凡て不定にして偶然なるが如く兒童に見えしなるべしと雖も今より爲す所の事は一層明白なる智覺を以て爲さるゝを以て亦極めて精確なり、

其不羈獨立なる高尙なる風姿と確乎不拔の勢力とを以て夙とに童男童女の心を吸引して離るゝこと能はざらしむる武士は實に彼等の心をして快然たらしむる完全なる理想の美なり。武士の鼓吹せし感情と其小兒に附與せし理想とは兒童に重要なる事を說明するに於て比類なき價値を有するものなり。此遊戲と歌及武士等の詞は彼等が兒童を鼓舞して達せしめんとする目的に向て第一步を着くるものなり、

然れども題詞は我儕に警告して此遊戲に就き注意すべしと云へり。區別の感覺は比較と思慮とに由りて兒童の中に發達し始れり、此時に當りて兒童は動もすれば

將來に斯くなり得ると云ふ事と、今彼が現に自ら斯く有ると云ふ事とを容易に混同するの恐れあり。爲めに彼は將來に斯くなり得ると云ふ事を今既に自ら其如くあると信ずるなり。是れ吾人が兒童は未だ之れにつき何事も了解し得ずと誤想するに由りて遂に此大過に導き至らしめたるなり。我儕は兒童を愛するのあまり兒童の今現に有るものと兒童の中に將に發芽せんとしつゝある尙ほ軟弱なる性質とを區別せざるが故に、我儕の行爲に由りて兒童をして其將來成らんとすることを今現に爾かある如く想像するに至らしむるなり。是れ實に我儕にも兒童にも大害あることなれは双方の幸福の爲めに十分に之を了解する樣勉めざる可らず、兒童は實に他人の好意、親愛、注意及び賞讃に由りて善事を追及するの精神を喚起し得可きものなり。而して之を爲すには其兩親と一致して共に之を追及せしむるを以て最も重要なる事と爲す且つ彼が眞實に善良なるに非れば決して何人にも愛せられざる事を感ぜしめざる可らず。　而して此の如く兒童が他人の毀譽褒貶に意を注ぐに至らば苟も兒童の上に感化影響を及ぼすの位置にあるものは二事

の眞實に考ふ可きものあり。第一に兒童に對する行爲に於て兒童が將に有らんとすることと及び有り得べしといふことゝ、兒童が現に有ることゝを明白に區別せざる可らず。第二には亦兒童をして自己につき誤想を抱かしめざる爲めに明白精確に外觀及び人品を理想及び目的と區別せざる可らず。此等の事を正しく理會するとせざると之に注意して能く守ると守らざるとは實に兒童をして將來唯外觀に馳する者たらしむるか或は實着眞身の者たらしむるかの分岐する處なり。母は既に自ら愛らしき嬰兒の遊戲に由りて兒童の志望を養成發達するの力を有することを知りしなるべし。兒童將來の生涯を滔々汩々たる長江大河に比するときは今は尚ほ涓々たる溪流のみ。其水をして西流せしむるも將た東流せしむるも一に母の擇ぶ所に在り。然れども其既に長江大河となりて後は如何なる外力も之を奈何とも爲す能はざるなり、其他尚夙に兒童の心に啓發す可きものあり、即ち善を尊重し之に達せんとする勵精是れなり。此勵精は徒らに抽象的の善を尊重するに由らずして親しく目擊し得

る隣人の善事を尊重するに由りて喚醒し得るものなり。兒童の正當と認め功績ありと信ずる所にして而かも勵精すれば達し得らる可き他人の行爲を尊重し、之を兒童に示すことは寛大なる競爭心を刺激して大に兒童を興起せしむるに力あるものなり、

「母上よ、　猛く雄々しき、武士が　歌ふを聞けや、あの歌を」

「をさな子よ、　とくこゝに、來て、更に又　聞けや赤子の、一曲を」

こけの褥に咲きにほふ　薇薔の如く、母人の

衣の下に、包まるゝ　子供の姿は柔和にて

滿面無邪氣と、喜樂もて　滿たさるゝこそ、かはゆけれ。

なぜに此兒はかく強きぞ　ながき手腕を動かして

つくりたてたるものにより　思慮と強力を養へばなり

もし地に落つるものあれば　屈みて之を、拾はんと

樂しげにこそ見ゆるなれ　天の使は幾度も

小兒の友となりつるか
頰と額に、接吻し
子供より母に打注く
これこそ山なす慈母の恩を
「母上我身を伴なへよ
あちらにこちらに飛びかけり
再び母のふところに
腕にだかる、子の身には
小さき足はくたびれぬ
眼もつかれて、ふさがれぬ
されども母は、たのしげに
子供は寢籠に打臥して
日々つかまりて、幸福の

母の愛こそ天使なれ
接吻をもて、之を祝す
其接吻と愛の雨
よろこぶ心の感謝なれ
無限の愛よ、母上よ
子供は母より離れたり
息はんためにかへりたり
更に危害の憂ひなく
されど今よく寐入りたり
なほも唱歌をつゞけたり
かたく横木をにぎりたり
遊をするもこの横木

母は子供の身を祈り　衣を之に打かけぬ
寢る子の笑顏を、母は見て　天使の保護ある、事を知りぬ
天使の來りて、子の寢床　扇ぎ守るを信じつゝ
母はしづかに云ひけるは
「我兒よねむれ予もまた　眠くなるまで疲れたり
睡りは母と我子供　めぐまん爲に、來りしぞ

●武夫と惡童　（第九十、九十一ページ）

此遊戲の外相は前章の遊戲と異なることなし。人往々遊戲に由りて兒童の爭論乖癖及び强情を驅逐し其泣き噪ぐを靜めんと欲するものあり、此の如き方法の成功することは極めて稀なり。然れども人の此の如き事を試むる所以のものは亦多少の眞理ありて其根基とならずんばあらず。兒童の不安、爭氣、乖癖强情は往々身體

の不適よりするに非れば心意の極めて偏癖なる作用より起るものなり。而して斯る性癖は到底小兒自身の力に由りて其桎梏を破毀すること能はざるものなり。故に斯る性癖の發作を一變せんと欲せば十分の注意と看護とを以て小兒を助けざる可らず。之を爲すには其外觀能く兒童の注意を惹く可き全く意外にして目先變りたる物を捉り來り、兒童の眼を急に之に轉ぜしむるを以て最も善き方法と爲す去迚兒童の涕と叫とを止むるものは敢て全く新奇なる物に限らず、否な斯の如きものは反て往々其叫びを烈しからしむることあり。蓋し兒童の心を轉じて其怒を忘れしむるものは寧ろ意外なること俄然たること特に視官の強き感動に在るなり。例せば甚だ怒り易くして頗るなだめかたき兒童も薄暮不意に月を指示すか、或は他室に伴ひ行くときは忽ち穩靜平和に復するものなり。晝間に在ては不意に或る活動物例へば雛の如きものを示すか若しくは意外に其境遇を轉ずることは皆同じ結果を見るを得べし。此遊戯と歌とは實に此二者を幷せ用ゐたり。何となれば是れ亦前回に於て既に形貌と詞とを以て兒童の注意を擒にし得たる武士を以て

再び始めたればなり

題詞と歌とは自ら明白に此の遊戯の精神を示すが如く又容易く自らの說明を爲せり

前章說明の結論は亦此章にも適用するを得べし

●武夫より隱匿　（第九十二三ページ）

此小遊戯に於ける手指の用法は前章と異なることなし、此に母と其兒とか學ぶべき第一の事は兒童を匿くし或は兒童をして自ら匿れしめ若しくは少くとも匿るゝと云ふことを意味す可き種々の方法に在り、此遊戯の中に存する精神は前章と異なることなく小兒と他の人々との內部心靈的の一致に立入り其一致の發達養成を謀るものなり。而して此精神は母と兒童との心靈的一致を更に感じ易く知覺し易き樣說明することに由りて一層深く兒童の內部の生命に立入るものなり。此

一致の知覺と感情とが成る可く同一の媒介（此處にては武士）を通過し來ることは母と兒童との心靈的一致に最も重要なることなり。若し否らざれば母子間の關係は德義上に非らずして單に肉體上及び智力上の關係のみとなり困難と禍害とは遂にこれより胚胎す可きなりこれ實に避けざる可らざる事に非ずや

既に前章に於て此思想に觸着し數次遊戲の歌に於て之を說明せしにも係らず、今又此に教育家の本分として決して看過す可らざる一の思想あり、母たる卿と其愛兒との極內の關係即ち兒童の性質、生命及其傾向に關する卿の意見是なり卿は自己に對し家族に對し特に其兒童に對し如何なる行爲を現はすか、たとひ其兒は尙ほ幼稚にして未だ何事も了解する能はざるが如く見ゆるも母の一擧一動は兒童教育に於て實に幽微にして而かも有力なる方便として甚だ重要なるものなり。母は子にして子は母なり兩親は屢々其子に由りて示さるゝが如く互に一體にして又其子とも一體なり。宜しく此等の語中に含畜する深意を熟考すべし。母たるものは其思想を單に感情の區域にのみ限らずして宜しく之を智識と確實なる實行に

迄擴充すべし、蓋し感情は誤解に由りて其適當なる範圍を超ゆるものにして利なくして反て害となることあればなり

「母よ此武士は何故に汝の兒を得んと欲せしか」。「彼は愛らしき善良なる兒童なるが故に武士は之を得んと欲せしなるべし。然れども汝の母も亦同じ理由に由りて彼を寵愛し武士に與ふることを好まざるなり、否な武士に彼を示すことさへせざりしなり、何となれば

かゝやける子よ我ちごよ　汝をば深く愛すなり
汝をば高くあがむなり
神は無上のよろこびを　我等の上に賜ひたり
にごらぬ心の愛と善　汝が精神に有ちなば
互に愛し愛さるゝ　其結ばりは何時までも
解くることこそなかるらめ
もし武士がこゝに來て　我子を得んといふならば

「いや〳〵我子は與まじ　決してやらぬ」と答ふべし、
「汝もし我を愛しつゝ　また親切にあるならば
母上我は善良に　永く御身を離るまじ」

●迷藏（第九十四、五ページ）

既に前に述べし如く母の胸又は頸或は外衣の下若しくは膝蔽の中に匿くるゝ遊戯か常に新鮮にして興味盡きざる快樂を小兒に與ふることは人の皆よく知る所なり。此興味不盡にして決して變らざる心の傾向と幼稚時代の元氣の富盛とに由りて之を觀れば迷藏の遊戯は小兒の教育と發達とに最も重要なるものなりとす。然れども母の心情生命及び動作と小兒との本來自的然の一致が往々誤解せられ其正當なる限界を超ゆるに由りて反て母及び兒童に害を及ぼすことあるは前章の遊戯に於て既に認識せし所なり、若し一致にして誤解せらるゝときすら尚ほ斯

く多少の害ありとせば況して隔離の場合に於ては其誤想、誤解及び不明了等に由り來す所の害果して幾何なるべきや推知するに餘あり。　此理あるが故に母は兒童が斯く喜ぶ所の迷藏の遊戲に由て隔離に對しての第一の動機を知らず識らずの際に兒童の心に挑發すべし、此れ善き事なり。唯母は兒童を養育する際に當り總て與ふることは受くること、離る可らざるの關聯あり而して之を始むるには先づ受くるよりせざる可らざることを能く感知せざる可らず、卿は迷藏の遊戲に由りて之を熟知するなるべし。故に母は母たるの愛と子を思ふ熱心とを以て隔離に對しての動機を挑發することを明了に認識せよ。小兒は已が身を匿くして母より隔離することをなす、彼は母が長く已を見出し得ざる樣にと匿くれ由て以て母より隔離せんことを好むことを漸く學び始むるなるべし。此處こそ是危險の端の伏する處なれされば小兒をして隔離を以て快樂となし、益々母より遁匿するに至らしめざる樣善く注意せざる可らず、否らざれば竟に母が全く彼を見出し得ぬ程に自らを隱匿することを好むに至るの恐れあればなり。母は其兒が益々發達するに

及んで遂に其實情と人品とをも隱蔽せんとするに至らしめざる樣注意せざる可らず其唯自ら匿れて樂しまんとするのみなる純潔なる遊戲の願欲の中に不知不識隱蔽を好むの動作が加はらざる樣注意する所なかる可らず、是れ實に危險の萌芽なればなり。我儕は此危險に關して多言するを好まず、然れども亦十分に之を明知し居らざる可らず。此危險は兒童の稍長せしとき已れの動作を隱くし又は其動作に現はれたる自己の本質をも蔽はんとすることを存し、特に其動作の露顯するときに母より正當なる懲罰を蒙むるのみならず、或は不當なる譴責をも受んかを恐るゝときに此危險に陷ること更に多しと爲す。　去ながら我儕は徒に母の心を傷めんことを恐るゝが故に以上述來れるが如き正眞の事の不正の方に縮けて發達するの醜事を此上更に指點する事をなさず、寧ろ如何にせば小兒の快活にして穩靜なる發達と全然相和する所の此無害なる遊戲より此等の惡結果を避け得べきやとの問に答ふることを爲すべし、其答とて他の奇あるに非ず唯宜しく此遊戲の主意と小兒の之をなす方法とに注意すべし、さらば容易く其方便を見出し得可

しといふにあるのみ。小兒が其身を隱くすとき卿は宜しく其全性質を觀察すべし。彼れは深く自ら隱くすと雖も其全心の注ぐ所は彼が再び母を見母が再び彼を見んことを欲するに在り。而して彼れが再び其母を見出せしときは彼の眼の如何に喜悅の色を以て輝くかを見よ。併し何故兒童は常に自らを隱くすを好むか、彼は常に母の腕に抱かれ母の膝蔽に坐し母の胸に憑り、絕えず互に相見るを得るなり、さらば彼は自ら隱くれて母より隔離し居らん爲めに斯く自らを隱くせしか。決して然らず、彼の自らを隱すは他なし、母と內部の一致あるを喜ぶの情あると全く此一致を自覺するに至るとに由るなり、即ち常に再會の豫樂を享受せん爲めなり。見よ彼れが母より隱くるゝこと長く且遠くして其喜びを得ることの多きに從ひ其內部一致の感情を醒覺增加することの愈大なるを。　アヽ母よ前に述べし危險を避けん爲めには心して彼れが再び母を見出し再び母に逢ふを喜び又再び母に見出されんことを欲するの情を養ひ長ぜざる可らず。思慮あり純潔にして獻身の精神に富める母よ斯の如き危險の存する點こそよく利用すれば却て大なる助の出

づる源なれ、斯の如きは蓋し神の世界に於ては到る處に行はるゝ妙法なり。卽ち前述の如く外部の隔離の大なるに從て內部の一致は益々增加し遂に一見すれば不幸の至大なるものと見ゆる困難の處が反て聖潔、和合、平和、喜樂の處となるに至ることあるなり、

一時の別れは又逢ふため　たのしき一致ぞ我目的
母よ此理をよく學べ　子供の看護は天福の
汝が身に降る種ぞかし

●杜鵑　（第九十六、七ページ）

唯此遊戲の外相をのみ考へその小兒に取りて深き意味あることに思ひ到らざる人は恐くは言ふならん、何故に此杜鵑の遊戲を爲すか、杜鵑と云ふの外迷藏の遊戲と何の異なる所あるかと。然り實に其內面に於て二者互に相關聯する所ありと雖

ども此遊戯を以て迷藏に比すれば更に一段の進步あることは兒童遊戯の順序に於て杜鵑の遊戯の迷藏の遊戯に次ぐを以て見る可きなり。然らば二者の異なる所は何くに在るか此遊戯の一段發達せし所の性質は如何。若しよく十分に小兒の遊戯に注意するときは容易に其相異なる所を發見するを得べし、即ち第一には隔離と一致とを一層判然と現はし兒童をして益々明白に二者を自覺せしめ、第二には二者を杜鵑の叫聲に由りて交雜せしむる是なり。此遊戯中に含畜せられたるものは隔離中の一致、一致中の隔離なり。隔離中の一致と一致中の隔離との自覺、感情は深く人心に存する所の良心の基礎なり、而して此の良心の喚聲は現に此杜鵑の遊戯中に既に兒童に聞ゆるなり良心の靜肅なる喚聲は一たび交感すれば其感情と自覺中に於て決して再び隔離す可らざる最高き神との交通なる心靈の一致の預覺にして、健康、幸福、平和、喜樂は實に其生涯を貫通して此預覺の發達する兒童に在て存するなり。於是て母の頭の上に在る圖の如く生命の太陽は恰かも母と二人の兒童とを更に高尙なる光の中に相合せしめんとするが如く赫々として昇りて

決して再び沒することなきなり．

小兒曰く「母上、何か私のさだかに知り得たることありや」と、母曰く「汝の內心の聲に傾聽せよ、そが敎ふる事に一として眞理ならぬはなきぞかし。其內心は敎へて曰はずや善は內心の喜を來すものなることを其所謂內心の喜とは何か考へ見よ、又告て曰はずや汝の父母の深く汝を愛し居ること、及神は汝の父にして汝の心に住み玉ふことを。去らば愛と眞理と感謝とを恒に有ち得んために心の中に此知識を潔く養ひ育てよ」。「アヽ母上よ、母上よ、兒は今や確に知り得たり、行末永く失せざるは子供に於ける母の愛なることを」。

●商人と娘及商人と童　（第九十八―百一ページ）

此の遊戲に於ける手の姿勢はいと容易にして又一般に人を知る所なり、而して圖畫も亦頗る明瞭なり、左右両手の三指其指尖相觸るゝものは商店を表はし、自由に

動くを得る左手の小指は店頭に立つ所の商人に擬し、右手の食指は左手の食指の下節の上に置れて帳臺と爲り、二本の拇指は貨物臺の前に立つ二人の顧客なり此二人の客は第一圖に於は母と小女、第二圖に於は父と兒童となり。圖に於ては二個の食指互に相重ると雖もこれ必ずしも必要に非ず、唯一指にて十分なりとす、凡て通常生活上の事は市場の事に至るまで皆各其法則あるものなり。小兒及び大人が自ら明白に自己の中に此等の法則を發見するときは亦喜んで人間生涯の市場に入り啻に自己の需要に關してのみならず亦人類一般の需要に關し、啻に外面の關係に於てのみならず亦內部の關係に就て夥多のものを齎らし來り。而して恰かも鏡に寫し見るが如く人類百般の生產と需要の中に生命を發見し成し得る限りは此反射の結果に照らして啻に生活上必須のもの丶みならず亦其心に快樂を與ふるもの、及啻に外面人意に適するのみならず亦內實より眞に人を喜ばしむるものを撰擇し、以て之を我有と爲すを得可きなり。此內部の宗敎的喜樂はたとひ小さく見え又之れに達することと稀なりとするも實に兒童が屢々市場に往來するこ

とを好む所以の理由にして其多般厖雜なる性質の中に潛んで存する兒童內部の喜樂の基礎なり。屢々市場に往來する所の者は能く家內の生活に必要なる美麗にして且有用なるものを撰ぶを得るなり、小さき娘、若き婦人、家の母又は妻は能く精緻なるもの。有用なるもの、其他總て生命を保護するに必要なるものを擇び、童男、少年、大人又は人の父は力あるもの、强きものを擇ぶなり。善は常に有用と伴ひ、美も亦た有用より生ずるものなり。硬軟强柔は最も美しき生命調和の中に結合し內部一致の花は或は併立し或は分離して互に其關係を表示する外部の均齊一致より咲き出るものなり、

外相の中に內包を察し、分離の中に一致を悟り、複雜の中に一致を見、特殊の中に普遍を求め圖畫の中に生命を覺知し、又其反映に照して自己を見、更に進んで外部の生命を知ることを學び、由りて以て內なる獨自一己を顯はすの方便を見出すことは是等は實に小兒が市場に行くとき感ずる所の無意識誘引衝動の基礎たるものなり。兒童は僅かのものを購ひ得て家に歸り其物の人形なると、馬車なると橫笛なる

と羊仔なるとに係らず、之れに由りて自己及び自己の世界を活如として現はし得るに於ては實に滿足を感ずるものなり。此故に市場に往くことは大に兒童の開發に力強き刺衝を與ふるものなるを知るなり、

子供と共に市に行き　見るものも又買ふものも
皆將來の好結果　生ずるたねとならしめよ

●會堂の戸及び其窓 （第百一、二ページ）

両前腕を成る可く眞直に立てゝ戸口の柱に擬し、両手を互に相傾け、其頂上にて相合せ以て「アーチ」を形くり、一手の四指を他手の四指の上に少しく開て戸口の上なる窓を示し而て二本の拇指を立つるときは宛も小さき鐘樓の如く見ゆるなり、總て兒童の外に現はるゝ自由の動作は皆是れ内に在るものゝ標號にして外觀は即ち此内面の存在を解明するものなり、故に人の心を惹く可き心内の愛嬌は總て

純潔なる兒童の面貌に溢れて輝くなり、

凡て小兒は凡そ複雜なる生命の中に(其誤り易きにも係らず)無意識に糢糊として預知し且つ求むる所のものにして若し已れに生命の一致と調和とを示すときは益々深く之を感じ更に之と一致して存せんことを欲するものなり。思想上の集會と評議會とは此思想卽ち前既に說明したる所の發達の新階級に於ては力を盡さずしては得難き所の此思想をば小兒に與ふるの端を爲すなり。是故に總ての集會特に大人の集會は大に小兒の心を惹くものなり。故に亦此集會が心靈上の深意を含み生命に關涉あるときは彼等は其家族と共に敎會に行くことを强く好むものなり。屢々會堂に行くときは小兒の心靈次第に發達し遂に會堂に往くことを以て眞成の喜びと爲し時間の長きをも覺えざるに至るなり。此喜悅の原因は說敎の言語にも非らず、又讃美歌の詞にも非ず、唯多くの大人と趣味を共にし、其或は語り或は歌ひ或は爲す所の事柄に已も與るを得るとの事實に在り、是れ其心中に在る預覺志望感情生命等を幾分か說明して之を確乎たらしむるに由るなり、

然れども此等聞きし所の說敎の言語及び其意義に關しての疑問は兒童の經驗感情及び其意見の範圍以外に出て、了解す可らざるときは其心靈の發達と心靈必要の增加とを待て答解せられざる可らず。此遊戲の歌は卽ち之れが說明なり此歌は小兒の發達に於て二つの判然たる段階を示せり曰く近、曰く遠、曰く早、曰く晚。此の如く慧敏なる母が是迄說明し來りしものを查察し其中より小兒の發達進步に最も善きものを撰ぶは作者の偏に希ふ所なり然れども其中最も重要なる一事は直ちに小兒の衷心に語り其中に生命の基礎泉源卽ち總ての生命の生命總ての光の光、總ての愛の愛、總ての善の善なる神との相合一致の思想を反響せしめ以て小兒の有する預覺を成就して益々之を强固にする事是なり、

●小兒の繪　（第百四―六ページ）

小兒を膝の上に坐せしめ母自身の右手の食指或は小兒の指を以て空中に簡單な

る見易き形を畫くべし。小さき板の上に薄く砂を敷き其上に畫けば更に善し兒童が十分に成長せしときは石盤の上に畫かしむべし。或は砂より始めて石盤に進み終に空中に唯外形を畫く樣順次に進む可なり。此等の方法は皆眞理に基くものなり空中に畫くことは明確なる運動にして而かも十分意味ありとして既に兒童に喜ばるゝものなり。繪を畫くことの甚だしく兒童の心を惹き其甚だ愛好する所なるは是れ實に兒童の心中に在る創造力の第一着の表明にして又割合に簡易なる表現法と見ゆればなり。蓋し彼は既に自己の中に複雜を養成し、複雜なる一致の中に個人の生命を見るに至り而して此の如く既に自己の中に一小世界を形成すると共に自己の力に相應なる容易き方法を以て此世界を表現せんと欲するなり。繪を畫くことは亦知覺より再現に向て一歩を進むるものなり。小兒は其既に知れる所の種々の物を或は査察し或は分類して之を畫き以て觀察に便にし將來生存上有益の物を撰び有害の物を避くるに易からしむるなり、然れども是等一切の事に優りて重要なる一事あり卽ち夙に造物主を認識したる者は有意識に善を表現

する爲めに其賦與せられたる創造力を用ゆること是なり、何となれば善を行ふは受造物と造物主との間に存する紐索と謂ふべく、有意識に善を行ふは卽ち自覺的紐索にして眞に完全なる神人の一致、卽ち神と一個人及び全人類との一致なればなり、故に此一致は總ての教育の起發點にして又其恒久の目的なり、

●表紙にある二圖の説明

（譯書にては卷首目錄の次にあり）

母、母の愛、母の全性及び母と其兒との內部の一致は是實に人間教育の唯一眞正なる發端にして又最も純潔なる源泉最も確乎たる基礎なり。蓋し小兒の最も幼稚なる時より夙に其男たり女たる個性特色を曉る者は彼の無私無我の思想と精神とに滿ち、神と一致し人間の此兩面(男女)を均しく愛する所の母の外なければなり。故に表の表紙(此譯書には卷首に收めたり)には母が人類の蕾なる童男童女を優しく其腕に抱き愛らしく其胸に凭らせ居る圖を畫けり。此母は其性質職分及び地位を自覺するものと

して表はされたり故に其頭に槲の花環を戴けり。童男は其自然に有する男子たる精神に由て動れしもの、如く外方に身を伸べ、又一切の事物を聯結する所の内部一致の感覺を既に預想せしもの、如く球をつなげる紐を手に持てり。此の如く彼は其少時に於て既に人生の勵精及び其結果を示せるなり、

眞理は深き海に住み　　一致の中の潔白も
亦是れ深き海にあり　　もし健康さへ常ならば
たしかに目的を達すべし

童男が其男兒たる性質を現はして母の腕より活劇の世界に伸び出る如く少女は亦まことの娘の如く恰かも心と心と結合するばかりに緊密に母に抱きすがり而して十分に母の愛と誠とにたよりながら其安全の塲所より小兒らしき無邪氣と直實なる眼色を以て今母が歩み行く所の刺ある薔薇の花を撒き散らされたる生涯の道を眺め居れり。蓋し此道は他日彼女が一般に人たるもの、達す可き彼岸を目指し進み行く時に當り亦自ら通過せざる可らざるの道路なり。　母は自己の養

育の力によりてかくも其天性の相異なる二人の幼兒を其豫め定められし目的に發達せしむることの極めて困難なることを深く感じ、斯くも相反せる性質を有てる二人を產出せしめ玉ひたる人類の父に祈り其智慧と能力とを得んことを確信して熱心に天をながめ居れり、

斯くして兒童撫育の初に於て慈愛、信任、忠實の精神は信賴す可き盡力及び無私なる思想と相合體して現はれ而して神との一致も亦此に存するなり、

「母の愛、母の歌、及母の遊戲」。兒童の生涯に於て此三者の養育は亦此遊戲及歌の書の特別なる目的なり。 畫工は表紙の表の圖に於ては兒童最初の撫育の源泉たり、精神たるものを標號的に示し。裏表紙の畫に於ては次に兒童の達す可きものと、かゝる撫育の結果とを察知し得可らしめたり。其畫景及び排置に至ても後者は全く前者と異にして、第一圖にては內部に養はれたるものを示し第二圖にては既に養はれたる潛勢力の外に現はれて活動する模樣を表はせり。母之を始め父之に次で更に進ましむ。母は先づ思慮を盡して養育し、父は強固に支配して之を活動せしむ。父

は其兒童を岩石路に橫はり人跡未だ至らざる險阻なる生涯の高處に導き至らしむるを以て自己の責任と自覺せり。父は其胸中に靜かに動く所の愛心と勢力を蓄へながら仰て既に達せられし成功を深く謝し。母の祈禱の斯の如く十分に應驗ありしを痛く喜び居るもの丶如し。又男女二兒の姿勢を視るに女兒はひたすら父に倚り縋り其導くまに〳〵從ひ行くに反して男兒は父に挺んて丶銳意前方に直進し行路の艱險を踏破て其最高頂に達せんとするの槪あり。男兒の養育には最始より母の全力を要するが故に母は之を右腕に抱けり。父の務は之に反して夙に其男兒を導て生途の艱險に向はしむるの必要あり、故に之を導くに其左手を以て輕く其手を拉き成べく兒をして自己の力によりて進行せしめんとす。女兒に至ては則ち否らず、其齡漸く長じ未熟險難なる生途に向ふに及びては勇猛勁健なる父の保護を要すること愈〳〵增加するを以て父は之を健强なる右手に携へ、女兒も亦一意之に信賴倚任し其が導とあらば如何なる難所をも辭せざるの心あるはその堅く父の手に縋り身を之に緊接せしめ居るを見ても明なり。父の有する精神は

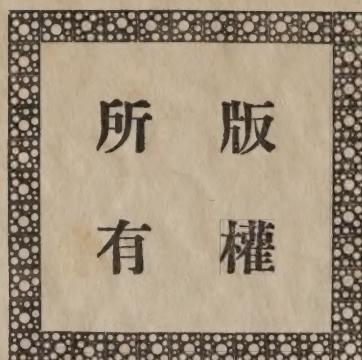
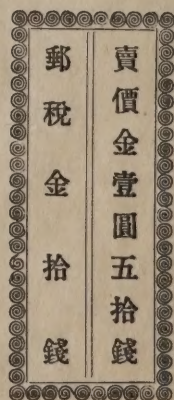
その剛健確固なること恰も其頭上の蒼鷹の如く、生途の難に遭ふ毎に之を甲冑となして世の辛酸と戰ひ、以て其偉大活潑なる事業によりて人の父なる天の神に實行上の感謝を奉れり。蓋し彼はよく自己の高尚なる禀賦、雄々しき强力及體面、幷に其尊貴なる天職を識認し常に其心に

「無私の心情、明確なる思想、及高尚なる行爲は人を爲る」

との眞理を服膺し、之を自己の前途に實現せんと期するもの、如く確然として其生途を渡り居るなり、

更に二圖を併せ考ふるときは以て人間を代表するの畫圖と看做すを得べし。即ち父母が其兒女を得て明に自己の天分を識認し、平和、喜樂、自由を以て其目的となし無私の心情、明確なる思想及高尚なる行爲を以て、茲に示す所の方法により、內外兩面の生命を撫育修養し以て其子女の敎育を完成せんと勉め居るもの是豈に人間の眞趣を示すの好畫圖に非ずや

母の遊戲及育兒歌 大尾

明治三十年三月廿五日印刷
明治三十年九月廿五日發行
明治四十年三月廿七日再版

賣價金壹圓五拾錢
郵税金拾錢

譯者兼發行者　アンニー、エル、ハウ
神戸市神戸中山手通六丁目外二十二號

印刷者　矢部外次郎
大阪市東區南久太郎町四丁目百番屋敷

發兌元　頌榮幼稚園
神戸市中山手通五丁目

大賣捌所　福音社書店
大阪市南久太郎四町丁目百番邸
（振替貯金口座番號壹五六五）

印刷所　堀越幸
大阪市西區阿波座二番町一番地